

家庭内における非家族成員による家事の代替可能性

ー フィリピン駐在の日本人主婦のメイド雇用の実態から ー

山本 理子

(京都大学大学院文学研究科 博士後期課程)

2010 年 1 月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

家庭内における非家族成員による家事の代替可能性
～フィリピン駐在の日本人主婦のメイド雇用の実態から～

京都大学大学院 文学研究科
行動文化学専攻 社会学専修 博士課程
山本 理子

1. はじめに

日本では、戦後、近代家族の成立により、私的領域は公空間から切り離され、情緒的な関係を基礎とした家族（核家族）において、主婦化した女性が家事育児といった再生産労働とその責任を主として担ってきた。そんな現代日本において、女性が家事育児を一手に引き受ける背景には、一部の家事での機械化による負担の軽減とともに、家事の省力化や、クリーニングや惣菜の購入などの家事の外部化がさまざまに組み合わせられて可能になっているという物理的・現実的な側面がある。一方、人に家の掃除をしてもらうという形での家事代行サービスは安価とはいえず、一般的に多くの日本人にとって日常的に利用するのは金銭的な面でも難しい。そうした状況において、主婦の手によって家事育児がなされること自体に価値が見いだされ、家事に「愛情表現」という意味が付与されることで、主婦が家事を担う一面を後押ししてきた。そんな社会的状況にある現代日本の主婦にとっては、近代家族の成立以前の、戦後まもなくまで、いまほどもめずらしくはなかった家事使用人（メイド）の雇用は、自分の生活になじみのないものとなっている。

しかし、実は、メイドの雇用はアジア諸国をはじめ、多くの国で家事育児負担を解決する重要な手段として機能している。台湾や香港、シンガポールなどの国では、言葉や文化的背景が異なる海外からの出稼ぎ労働者が住み込みの家事使用人として雇用され、生活空間を共有するのである。そして、日本人でもメイドの雇用がめずらしくない国で生活する機会を得ると、日本ではメイドを雇うことを考えたことがないという人さえ、メイドを雇う生活を経験することになる場合もよくある。

では、実際に、メイドになじみがなかった現代の日本人主婦に、家事使用人を雇用する機会が与えられた場合、日本人主婦はどのような生活を経験するのか。メイドによって代替できない家事は存在するのか。また、家事負担に付与されてきたといわれる愛情表現というイデオロギーは、どう変化するのか。メイドを（特に住み込みで）雇う場合には、家族／家庭という私的領域は変化するのか。本研究は、フィリピン・マカティ市に住む日本人主婦を対象にインタビュー調査を行い、日本人主婦にとってメイドを雇用するという生活がどのように経験されるのかを記述し、以上の問いを明らかにすることをめざす。

2. 問題の設定

主婦に家事の負担が集中するという現象は歴史的なものである。日本でも、高度経済成長期がはじまるまでは、家事使用人の雇用は決して珍しいものではなかった。しかし、高度経済成長がはじまるころに、都市の求人が増加し、結果として若い女性に女工や店員、事務員などの住み込み女中以外の選択肢が増えた（清水，2004：174）。また、かつての女中は仕事という目的だけではなく、「嫁入り支度」「行儀見習い」という目的ももっていたが、若い

女性は、戦後の生活様式の変化から嫁入り前に女中になって行儀見習いすることを好まなくなった（品田，2007：54-55）。そのため、女中のなり手は高度経済成長期がはじまる頃に急激に減少した。住み込み女中の充足率は、全国レベルでは約5割でも、東京のような大都市では2割前後になるなど、女中の供給不足が社会問題化した時期もあった（清水，2004：154）。それと同時に、高度経済成長期には、家電が人々の生活を便利にし、主婦ひとりでもある程度の家事が、あまりに時間をかけなくても仕上がるようになったため、女中を必要としない生活スタイルに変化していったのである（清水，2004：203）。

この背景には、家事使用人が家庭から姿と消したのと同時に、戦後の近代家族の成立がある。山田（1994）は、近代家族の基本的性格として、①外の世界から隔離された私的領域、②家族成員の再生産・生活保障の責任、③家族成員の感情マネージの責任、をあげている（山田，1994：77）。そして、近代家族を支える装置として、愛情を家族責任と結ぶイデオロギーが存在するとし、「家族の中に、人格や愛情を閉じ込め、家族に再生産責任を負わせる」（山田，1994：84）ことによって、つまり、「『家族の愛情』という一種の信仰が、資本主義における『労働力の再生産』を支える」と分析する。また、落合（2000）は、公私の分離、情緒性、人間再生産機能という点で山田と近代家族観を共有している一方で、さらに近代家族のメルクマールとして「既婚女性の専業主婦化」と「産児数の減少」（少子化）を提案する（落合，2000：19-20）。産児数の減少は、子どもひとりにかかる手間と金、そして愛情の増加を意味し、家族における子ども中心主義的態度を生じさせると考えられる。また、女性が性別役割分業により結婚後に家事専業主婦となる現象は1970年代半ばまでは進んでおり、その後は既婚女性の就労率は上がったものの、依然として家事責任は女性の役割とされる風潮は根強い。つまり、日本では戦後、性別分業によって、男性の雇用労働者化と合わせて、家事責任を担うために既婚女性は主婦化し、さらに家事責任を負担して他の家族成員（とりわけ子ども）に貢献することこそが、愛情表現とされてきたのである。

こうして、近代家族の形成を経験した現代の日本人にとっては、私的領域に人を招き入れて、家事を委託するということに抵抗感を示す人は多い。第28回国民生活センターによる調査では、業者や家政婦さんに日常的な家事をやってもらうことに抵抗を感じるかという問いに対し、「非常に抵抗を感じる」33.5%と「多少抵抗を感じる」47.4%を合わせて、「抵抗を感じる」と回答した人は合計で80.9%にのぼった。「抵抗を感じる」と回答した人にその理由をさらに尋ねたところ、「自分でできるから」（67.5%）、「他人にプライバシーをのぞかれるようでいやだから」（65.4%）、「料金が高そうだから」（49.8%）という理由が上だったという（国民生活センター，1998）。このように、家事は高いサービス料を払ってまで、他人に委託するほどのものではなく、またそのために私的領域に他人を招き入れる機会を作りにくいと考える傾向が伺える。

他方、近年のグローバル化とともに、先進諸国においては、少子高齢化や女性の雇用労働者化によるケアの担い手の不足や、国の予算の削減による公的サービスの低下により、公的領域・私的領域の双方で「ケアの不足」（Hochschild, 2003a: 214）が生じている。解決のために、第三世界の国々の女性たちが、メイド、あるいはケアワーカーとして先進諸国に輸入されている。感情的な結びつきを伴うケアを、先進諸国が第三世界から積極的に輸入するという「新・感情帝国主義」（Hochschild, 2003b: 27）とも指摘される現象が広がっている。

アジアにおいても、台湾やシンガポール、香港といった国々では、フィリピンをはじめ、ベトナムやインドネシアといった周辺の第三世界各国から、多くの女性労働者をメイドやケアワーカーとして輸入している（Lan 2006, Constanble 2007, 上野2007）。日本も経済連携協定に基づき、各家庭のメイドとはいわないまでも、介護の現場では2008年から外国人のケ

アワーカーの受け入れがはじまり、ケアの不足を、第三世界からの安価な出稼ぎ労働者によって補う方向も模索しはじめている。このように、私的領域における仕事を家族成員以外の他者に、しかも国も文化も異なる安価な外国人労働者に委託するという形でのグローバル化の波は、それにかわりうる画期的な代替案が提示されない限り、近い将来、日本にもさらにはっきりとした形で、またさらに私的領域に入り込む形で押し寄せる可能性がある。

また、家事＝愛情表現という近代家族の装置を無意識に経験してきた現代日本人ではあるが、実際にメイドの雇用が一般的な国に駐在することにより、海外で生活する機会を得た場合、メイドを雇う。先に見たように、業者や家政婦に日常的な家事を委託することに抵抗感を示す日本人が、メイドを雇う生活をどのようなものとしてとらえるのか。

現代において、海外の日本人がメイドを雇う経験についての唯一の研究と思われるものは、香港在住の日本人駐在員家庭の主婦を対象に行った聞き取り調査に基づく西（2004）の研究である。西によると、メイドの雇用によって、家事が二極化し、一部の家事（アイロンかけ、掃除など）についてはメイドに委託し、料理・育児については主婦のコアワークとして認識されること、メイドへの指示（管理）という側面が強くなることが指摘されている。とくに、育児についてはよりいっそう重視する姿勢が明白になったとしている。

本研究においては、西の知見をふまえながら、日本人がメイドを雇うと、どのような経験をするようになるのか、メイドに家事のいずれを、どのように任せるのか／任せないのか、近代家族の形成とともにもたらされた、私的領域はメイドという他者の存在によってどのように変化するかを、よりミクロな文脈に照らして詳細に考察することで、明らかにしたい。

3. 研究の概要

3-1. 調査方法および対象者の属性

本研究は、2008年11月～2月にかけて行ったインタビュー調査に基づくものである。調査対象者は、フィリピン・マカティ市在住で、メイド雇用経験をもつ日本人駐在の主婦28人である。対象者の基本属性については表1の通りである。

サンプルの収集については、スノーボールサンプリングを行った。はじめは3人のゲートキーパーから、のちにはインタビューを受けた方から別の方へと、メイドを雇用している日本人主婦を紹介していただいた。その結果、本研究の対象者の年齢は30代～40代に偏っており、子どものいない1人を除いて、27人は子どもがいる母親であり、そのうち25人の対象者の末子年齢は未就学児であった。そのため、本研究から得られる知見は、主に絶対的な家事量が多いとされる、子育て世代の主婦についてのものにほぼ限定される。対象者全員が核家族世帯であり、調査時点でフィリピンでの雇用労働に就いている者はいない。また、対象者が駐在の主婦としてマカティ市に滞在するようになった期間は数年程度である。それは多くの駐在員が数年単位で転勤を繰り返すことが多いことを反映している。

現在通いのメイドのみを雇っているのは、9人である。そのうち3人は、以前（主婦になる前の経験もあわせると）住み込みのメイドを雇用したことがある。他の6人は通いのメイドを雇った経験しかない。また、少なくとも全体の8人は同時期に複数のメイドを雇った経験があった。対象者のうち17人は、メイド本人の希望による退職や、トラブルを理由とした解雇により、メイドが途中で変わったという経験があった。現在雇用中のヘルパーの年齢については、20代から50代と幅広い。

表1 対象者の属性およびメイド雇用歴（調査時点）

仮名	年齢	在比 年数	子ども 人数	末子 年齢	メイド 雇用歴	現メイド 雇用形態	現メイド 雇用年数
A	30代	1年	1人	2歳	1人	通い(週4日)	1年
B	30代	6年	3人	2歳	3人以上	住み込み1人	2年
C	30代	1年未満	1人	0歳	2人	住み込み1人	1年未満
D	30代	2年	0人	-	2人	通い(週2回)	1年
E	40代	2年	1人	14歳	1人	住み込み1人	2年
F	30代	1年未満	1人	0歳	1人	住み込み1人	1年未満
G	30代	1年	1人	2歳	4人	住み込み1人	1年未満
H	30代	2年	1人	1歳	5人	住み込み2人	1年未満, 1年 未満
I	30代	1年未満	1人	0歳	2人	通い(週6日)	1年未満
J	30代	1年	1人	0歳	2人	通い(週6日)	1年
K	30代	3年	1人	2歳	2人	通い(週3日)	2年
L	30代	7年	3人	0歳	6人	住み込み2人	1年未満, 1年 未満
M	40代	1年	3人	2歳	5人	通い2人(週3 回ずつ)	1年, 1年未満
N	30代	1年	2人	0歳	1人	住み込み	1年
O	40代	3年	1人	3歳	1人	通い1人(週3 回)	2年
P	30代	3年	2人	0歳	5人	住み込み1人 通い1人(必 要時)	2年, 1年未満
Q	30代	2年	1人	0歳	2人	通い(週6日)	1年未満
R	30代	1年未満	2人	0歳	1人	住み込み1人	1年未満
S	30代	1年未満	1人	1歳	1人	通い1人(週3 回)	1年未満
T	30代	3年	2人	1歳	1人	住み込み1人	3年
U	30代	3年	2人	1歳	3人	住み込み1人	1年未満
V	40代	2年	2人	0歳	2人	住み込み2人	2年, 1年未満
W	30代	5年	1人	0歳	1人	住み込み1人 (週3日)	1年未満
X	30代	2年	2人	1歳	4人	住み込み1人	1年
Y	30代	3年	1人	4歳	4人	住み込み1人	1年
Z	40代	2年	1人	11歳	6人	住み込み1人	1年未満
AA	30代	2年	1人	4歳	2人	住み込み2人	2年, 1年未満
BB	30代	2年	2人	0歳	7人	住み込み	1年未満

注

「在比年数」については、対象者には結婚前にフィリピンで仕事をしていた人が2ケース含まれるが、ここでは結婚後に主婦となってからの在比年数とした。

「メイド雇用歴」については、臨時雇いのメイドを含む人と含まない人がいる。

調査にあたっては、半構造化インタビューを行った。主な質問項目として、メイドの雇用歴、メイドの採用基準、メイドの労働環境、メイドのいる生活についての良い点・悪い点、メイドが代行している家事、メイドに任せられない家事、メイドとの関係、メイドの雇用による家事についての意識の変化などを尋ねたが、調査対象者が質問項目以外について話した内容についても本研究のデータとしている。インタビューは、調査対象者の自宅に伺って行うことがほとんどであったものの、調査対象者の希望に合わせて、カフェや筆者の自宅で行ったこともある。インタビューの時間は、1時間半～4時間程度であり、調査対象者によって

は2回に分けて行った。多くは、1対1でインタビューを行ったが、2～5人の人にグループインタビューとして聞いたこともある。グループインタビューの場合には、単独のインタビューに比べて各対象者の発言の程度がグループのダイナミクスによって左右されるため、データが複雑で内容的に多様となる傾向があり、「ある見解が誰のものかを特定することが共同の意味形成プロセスの中で困難になる」という問題点に注意しなければならないが(Uwe 1995)、対象者の希望がグループインタビューであった場合にはそれにしたがった。それらのインタビュー内容は録音し、そのトランスクリプトをデータとして分析する。また、筆者がインフォーマルな会話から得たメイドに関する情報についても参照する。

3-2. メイド雇用の特色

本節では、日本人主婦がメイド雇用にいたるきっかけ、メイドの探し方・面接、労働条件(給料・労働時間等)について、調査から得られた情報をとりあげる。

3-2-1. メイド雇用のきっかけと利点

調査では、メイドを雇うきっかけについて尋ねた。家事代行そのものを直接的に期待してメイドを雇ったというよりも、むしろ病気や妊娠などの緊急時のヘルプや、生活の不便さを補うための存在として、あるいは社会がメイド雇用を不可欠のものとして構成されているために、メイドを雇用したという意見が多かった。また、メイドを雇う契機は、メイドを雇う利点そのものとして語られることも多い。ここでは、メイドを雇うきっかけと同時に、メイドを雇う利点について述べる。

◎海外生活の不便さの解消

メイドを雇うきっかけとして、途上国における、独特の生活の不便さに言及するケースは多かった。それは海外生活からくる漠然とした不安だったり、実際の治安の悪さだったり、日本のように何事も時間通りにすすまないといった社会環境だったりする。

【事例】

Aさんは、「はじめ、あまり手伝ってもらう気がなかった」が、日本とは勝手が異なる海外生活への漠然とした不安からメイドを雇うことにしたという。

A「家事を手伝ってほしいというほど、子どももまだ一人だったので負担はなかったんですけども、こっちの暮らしが初めてでどんなふうか分からなくて、そっちの不安が大きかったので、いざという時のために現地語をしゃべる方がいるというのは助かるかなと思って。トラブルがないときは特に問題はないんですが、何かちょっとトラブルがあったときに、自分の代わりに話してくれる方がいるというのが安心できたので、それが一番大きかったですね、私の場合は。」

Aさんのように、漠然とした不安だけでなく、実際に治安の悪さを考慮して、外出時のつきそいのために必要ということもある。

【事例】

Bさんがフィリピンに赴任したのは6年前。彼女によると当時は現在より治安が悪く、外出もメイドのヘルプが必要だったという。

B「きっかけは、最初から主人が、メイドがいないと生活ができないであろうという想定で。来てすぐを探しました。いまより治安とか生活状況が、こんなに便利じゃなかったし、もっと暗い感じだったね。そんなに外も出歩いたりしなかったし。子どもがいたから、買い物するのでも、やっぱり子どもを連れて買い物に行ったり、ひとりで出歩いたりっていうのは危ないから、メイドさんを連れて。外に出るときも。私が話ができないから、家のメンテナンスのこととかそういうことでも、助けてもらいましたね」

治安という面では、外出の付き添いという以外に、留守番という役割が必要な場合もある。受付があってガードマンがいるようなマンションタイプのコンドミニアムではなく、ビレッジと呼ばれる地区の一戸建てに住む場合には、セキュリティの面や（メイドがいなくて泥棒が入られたという話は多いという）、配達物受け取りの都合から常に留守番役としてメイドが必要という事情がある。さらに、庭掃除など戸外の作業については、外部から誰が作業を行うのかがすぐにわかるために、メイドが必要という面もある。対象者のうち、Cさん、Eさん、Zさん、AAさんの4人はビレッジに住んでいた。

【事例】

ビレッジに住むCさんは、メイドを採用するにあたり、休日は日曜の朝に出かけても夜には家には必ず戻ってきてくれるという条件で働いてくれる人を探した。それほど、ビレッジでは誰か常に人が家にいることはセキュリティ上、重要なのだという。

C「こういう国なので、特にビレッジなので、家を空けることが難しいんです。誰かがいないといろいろと不都合があるので、やはり必要です。あと、ここは庭があるので、そういうお掃除とか、ごみ出しもあるし。フィリピンの習慣としてそういうことをメイドさんがやるから、日本人とか住んでいる人がやるとおかしいというところもありますから、必ず必要というところがあると思います」

（中略）

C「（採用にあたって考慮した条件について）料理と、あとは、できたら日曜日に日帰りで通える人がいいというのは探していたかな。ビレッジだから夜も誰かいつもいてくれたほうがいいというのがあったので、土曜日の夜から帰るというメイドさんもいるのですが、できたら日曜日に1日だけ日帰りでというのは探していました」

さらに、メイド雇用における重要な利点として、ほぼすべての人が、デリバリーやメンテナンスについての応対を挙げた。フィリピンでは、飲料水を定期的に配達してもらうことが多い。また飲料水に限らず、ガスタンクや野菜、パン、料理などいろいろな配達がある。また、家の修理を頼む機会も多いうえに、害虫駆除のための定期的なペストコントロールや、台所のシンクの下にたまった汚水を掃除するための定期的なグリース・トラップ・クリーニングなど、家のメンテナンスのためにさまざまな人が出入りする。ただし、彼らは約束の時間通りに来ることはまずない。来る予定の日に連絡なく来ないこともしばしばある。そのため、留守番はメイドに求められる重要な役割である。

【事例】

Dさんはマニラ赴任して最初の2ヶ月ほどはメイドがいなかった。コンドミニアムに住んでおり、子どももいないので、緊急にメイドを必要とする状況ではなかったが、周りの人に勧められて、週2日の通いのメイドを雇うことにした。

D「（メイドがいなかったのは）2か月ぐらいかな。いろいろ皆さんに聞くと、メンテナンスが来たときにはメイドさんにいたほうがタガログ語がわかるし、いるほうがいいよというのを聞いて。留守にすることがあるとやっぱり助からからって言って」

また、英語での意思疎通に不安がある場合には、メイドは通訳としての役割も担う。

【事例】

Eさんはビレッジに住んでおり、家の修理や家のメンテナンスのために人が出入りすることが多い。しかし、Eさん本人は、英語での意思疎通に自信がなく、もっぱらメイドがその対応をしている。

E「わたしが英語をしゃべれないので、すべてっていったらすべてですね、ほとんどすべてにおいて、こちらのローカルの人との電話のやりとりは、ほとんど彼女がやってくれるので。助かります。というのは、一軒家で、すごく故障が多くて。うち自体が。それを直接というか、ブローカーとかに言ってもらえるので。あとは、業者が入ってきたときも、対応してくれるので。わたしは手をさすくらいしかないので。そういう、こまいところを話してくれるのがすごく、生活しているうえで、言葉が通じなくても、わたしの言いたいことは彼女がわかるので、何となくくんで、言ってくれるので。そのへんはすごく、役立っています。いろんな人が今日みたいに、プールボーイが来たりとか、ガーデナーさんとかも来るので。そういう人にも対応してくれるので。あとは、デリバリーとかも。そういうのはすごく、いてもらってありがたいなあと思いますね」

以上のように、メイドの雇用は、日本にくらべて独特の不便さを感じる海外生活を補うための手段としてとらえられている側面がある。

◎家事ニーズの変化に対する対処

メイドを雇用する直接的なきっかけが妊娠・出産や病気など、緊急時のヘルプが必要だからということがある。対象者は核家族世帯であり、海外生活においては緊急時に頼れる親族などが近くにいないからである。

【事例】

Fさんは、妊娠中の身でフィリピンに赴任した。フィリピンでの出産に備え、現地の人の助けが必要だと感じ、前任者から打診されたメイドを引き継ぐことにしたという。

F「偶然わたしの場合は子供が出来るっていうことで、もしかしたら妊娠してるとか子供が出来るとかでなければこっちでも雇わなかったかもしれないです。主人はちょっと最初

は嫌がっていたのでお手伝いさんに入ってもらうっていうこと、他人とやっぱり一緒に生活することなので、それちょっと抵抗があったみたいなので、わたしからちょっとお願いしてやっぱり妊娠中で何かあった時にとか。あとは現地の情報何も分からない、お友達もだれもいない状態で現地の詳しい人と一緒に生活できるとか、そういうメリットを考えると、あとは赤ちゃんが出来てからの慣れない生活があるのでっていうことで、主人を了解してもらったかんじ。」

また、病気や妊娠は雇う契機となるだけではなく、通いのメイドから住み込みのメイドへと、メイドへの依存度を高める契機ともなる。

【事例】

Gさんは、現在までに4人のメイドを雇ったことがある。マニラに赴任前はメイドを「全然雇う気がなかった」という彼女は、病気をきっかけに家のことが回らなくなり、急遽メイドを雇うことになった。その後、2人のメイドとはトラブルもあったせいで、一時はメイド不信になり、しばらくメイドなしで生活したこともあるが、また病気になって仕方なく通いのメイドを探し、その後妊娠して、悪阻がひどくなったことがきっかけで、住み込みのメイドを雇うにいたった。

G「やっぱり、病気してかな。家のことが回らなくなって。今日のごはんすらも作れないとか。結局、2回のアメーバ、悪阻。一番大きい3つのハプニング。わたしがなにもできなくなったというのは3つあるのかな。3回あったんだけど。やっぱりそのたびに、わたしが意固地になってがんばりすぎることで、家が回らないくらいだったら、上手に力を抜いた方がいいのかなって思ったのかな。どうしても助けてくれる環境がなきゃ、がんばるしかないけど、実際には目の前にあるわけだから。だからそれであきらめたというか。」

ときには、妊娠・出産や病気といった家庭内の急激なニーズの高まりをきっかけとして、料理ができないメイドから料理ができるメイドへ、または子どもの世話もできるメイドへ、ときにはもう一人メイドを雇う、というように、さらにメイドへの依存度を高めることもある。

【事例】

Hさんは、二人目の出産にあたり、信頼できるので気に入っていたメイドを、料理ができないためにやむなく解雇し、料理ができるメイドと子守専門のメイドを2人雇うことにした。

H「うちはもともとこっちで出産することにしたのね。二人目を。それで、〇〇さん（メイドの名前）がさ、料理がきらいだっていうの。一回頼んだんだけど、どうしてもやりたくないって言われて。やりたくないんだったら、こっちで出産するには、親にも来てもらうつもりがなかったから、料理してもらわないと困るのよね。それで料理してもらう人を雇わないといけないうね、っていうことになって。しょうがない、やむをえず、料理きらいだっていうから、その方に辞めてもらったんだけど。」

対象者のうち、妊娠・出産や病気をきっかけに、メイドを雇った、メイドを変えた、メイ

ドの数を増やしたと述べた人は、10人いた。このように、家庭内のニーズが急激に高まる場合には、近くに物理的な援助を頼れる親族などがいない環境だけに、メイド雇用はその解決の手段として機能している。

◎メイド雇用＝マニラ日本人社会の標準

フィリピンでは、中産階級以上では基本的にメイド雇用はあたりまえのこととして受け止められている。駐在員として日本人家族がフィリピンに赴任する場合には、彼らの社会的・経済的ステータスはメイドを雇う側とみなされて、むしろメイドを雇うことが暗黙に駐在生活の前提条件として求められることがあるという話も調査時によく耳にした。それにより、会社からメイドを雇用するように促されたり、先に赴任していた夫がすでにメイドを雇っていたり、前任者からメイドを引き継ぐことが決まっていたり選択の余地がなかったり、周りからメイドの雇用を勧められたりということはしばしば起きる。また、メイド雇用家庭が標準となっているマニラの日本人社会では、そういう人たちとつきあってメイドを雇わずに生活することはなかなか難しいということからメイドを雇用するにいたったケースもある。

【事例】

Iさんは、赴任前に、会社から委託された外部コンサルタントによる妻向けの研修会で、メイドを雇う生活が前提であることを説明された。

筆者「Iさんはどういうきっかけで雇われたんですか？」

I「わたしはもう、夫の会社の赴任前研修で、「雇うように」って。「雇用促進のため」とかで。」

H「メイドを誰か雇いなさいって？」

I「そうそうそう。そこで、みんなが雇っているのをたちきっちゃいけないよ、みたいな。みんながそうやって雇っている文化があるんだから、ちゃんとそれに従いなさいみたいな。」

H「それでフィリピンに貢献しろって？」

I「それもありーの、「ご主人に家事を手伝ってなんて、絶対に言わないでくださいね」って」

つまり、会社側としてはメイドを雇うことが、フィリピン社会への雇用面での貢献という点で重要というだけではなく、赴任家族の生活の助けとなることで、夫をまったく再生産労働にかかわらせる必要がなくなり、夫を完全なる労働力として確保できる点も重視している。

次にみる事例は、主婦本人の意志にかかわらず、メイドを雇用することが決まっていた場合である。

【事例】

Jさんの場合、夫より数ヶ月遅れて赴任したため、彼女にとっては駐在生活にはメイドが最初から存在していた。

J「きっかけは、でももう、最初から雇うのがあたりまえで。主人がもう見つけてた。最初の人は。」

ほかにも、前任者からの引き継ぎが決まっている場合や、赴任前から夫の同僚がメイドを用意してくれる場合、結婚によって夫が雇っていたところへ住むことになった場合など、メイドを雇う生活が標準となっているために、主婦のニーズにかかわらず、赴任当初からメイドを雇う生活がはじまったというケースはしばしば聞かれた。

メイドを雇うことが標準とされている場合、メイドを雇わないという選択はときにはプレッシャーを受けることもある。

【事例】

Kさんは3年前の赴任当初、子どももいなかったため、メイド雇用に自ら積極的だったというわけではなかったが、家が広いことに加えて、周りからメイド雇用の勧めを断り切れなかったことを、メイド雇用のきっかけとして話した。ただし、本人はやはりそれほど必要性を感じないため、住み込み（ステイイン）ではなく通いのメイドを雇うことにしたという。

K「部屋が日本よりも広くって、少しだけやってもらえたらいいかな？って思えたこと。あとは、初めは二人だったから、すごい切羽詰っていたわけではないけど、うん、やっぱり雇わないとマズイかな？っていう雰囲気はあったから」

筆者「え？マズイって？」

K「うーん、初め、ステイインにしなさいっていうのは、さんざんまわりから言われていたから。今と全然雰囲気ちがって。しなさいっていうのは、親切心から言ってくれているんだけど、ステイインのほうがラクだから、ステイインにしないの？っていうのはさんざんまわりから言われて、そういうメイドさんの紹介も、こういう情報があるよって散々言われて。結構、私たち夫婦の中では、ステイインはちょっとね」

さらに、メイドを雇うことが標準とみなされている場合、メイドを雇う人々が準拠集団としてとらえられる。そのため、メイドを雇わずに生活すると、ときにメイドを雇う人々とのつきあいに支障を感じたり、たびたび自己の生活状況との格差を意識させられたりすることになる。

【事例】

Lさんは、赴任後の10ヶ月ほどメイドを雇わずに生活していた。メイドとの英語での意思疎通に不安があったことと、家の中に他人が入ってくことに抵抗感があったからだという。しかし、結局メイドを雇うことに決めたのは、メイドを雇用しているほかの日本人とのつきあいのためということが大きな契機となったと語る。

L「やっぱり、こっちで生活したら、何となくもう、こっちって、1世帯に1人メイドさんがいるのが標準じゃないですか。だからだと思うんだけど、みんな結構お茶とかするし、みんなと同じように自分も生活したいなと思ったら、家事が全然できないんですね。（中略）みんながそうしているんだったら私もそっちに入りたいって、やっぱり思うし、ちょうど子供も1人目だったから、育児の情報とか、わからないここの土地の情報とかも、そういう集まりとかってたくさん情報があるでしょう？やっぱりそういう集まりには行きたいほうだったんですね。そうすると、遊びに顔を出すと御飯がつかれない、「パパ、ごめんね」って、レトルトカレーみたいなものが結構続いてあったりして、みんな雇っているし、じゃ、私も、みたいな感じ」

以上のように、メイドの雇用が駐在日本人のあいだでは標準的とみなされているために、主婦のニーズと関係なく、メイド雇用にいたることもある。

◎家事代行による家事負担の軽減

もちろん、家事代行を直接的に期待したことをメイド雇用の直接のきっかけと考えることもある。

【事例】

Mさんは、未就学児を3人抱えてフィリピンに赴任した。子どもの世話で掃除や洗濯まで手が回らないために、メイド雇用を考えたと語った。

M「雇うきっかけですか。お掃除をしてくれる人が欲しかったというのが、まず第一ですね。パパが半年前に来ていたんですけれども、その時はメイドなしだったんですね。パパは、掃除はしてくれていなかったんで、家族が来た時点で部屋の中は埃だらけで、歩けない状態だったんですね、もう、真っ黒で。来た時、下の子たちはまだ歩き始めたばかりのころで、とりあえず掃除をしてくれる人がいないと、子供たち3人を抱えて、自分は全く動ける状態じゃなかったんで、来てすぐ知り合いになったお友達に「掃除・洗濯だけでもしてくれる人でも構わないんだけど」ということで聞いてみたら、一番最初に雇った人が、ヤヤとして週3回働いていたメイドさんを、あいている残りの週3回をうちに貸してくれたのがきっかけで、その時に、「掃除・洗濯をしてください」ということをお願いして始めました」

ただ、ここで留意したいことは、日本人主婦のあいだで、マカティ市は空気が汚いために「床が黒くなる」という言説は、日本よりも家事の（掃除の）絶対量が格段に多いということを意味しているのである。

【事例】

Nさんは、フィリピンに赴任するにあたってみんなメイドを雇用すると聞いていたということもきっかけとしてあげたが、一方で次のようにも話した。

N「ももとから掃除が苦手なので。本当に掃除だけしてくれればいいや、みたいなところはありましたね。赤ちゃんがはいずりまわるから、絶対必要。真っ黒になりますよね、床って。」

筆者「この国はね」

N「この国はね。ほんと、最初に来てすごくショックだったので、掃除をしてくれる人は絶対ほしいって。ただ、それだけだったかな。雇うにあたっては」

多くの駐在員は、フィリピンに来てから日本で住んでいた家よりも広い家に住むことが多く、その分だけ、家事の絶対量が多くなるという点も指摘された。

【事例】

Dさんは先に述べたように週2回、通いのメイドに来てもらっているが、掃除については絶

対量が日本とは状況が異なると考えている。それは床が黒くなるだけではなく、住んでいる家が日本より大きいということも指摘している。

D「日本よりも住んでいる家が、多分ちょっと広いですね。トイレが1ヶ所ではなくて、2ヶ所も3ヶ所もあって。やっぱり排気ガスですぐに床が黒くなって。日本とちょっと状況が違うのかなというので。でも、日本より広いからかなあ、家が。日本だとあまり気にならないけれども」

つまり、家事代行を直接的に期待してメイドを雇用する場合でも、その背景には、床が汚れやすかったり、家が広かったりという日本にいたときとは異なる特殊な事情＝家事の絶対量（主に掃除）が多くなる、という現実があり、実際に主婦はそのように認識している。

◎自分の時間の確保

一方で、純粋に家事代行を目的とするのではなく、子どもを預けて自分の時間を確保するために、メイドを雇用するというケースもある。

【事例】

0さんは、週3回の通いのメイドを雇っている。メイドを雇う直接的なきっかけは、子どもが夜寝ている時間に外出するためである。

0「一番のきっかけは、夫が夜に出て行けないというか、夜におよばれするとか、最初にここに来た時はまだ1歳だから夜7時ぐらいには寝たんです。この子はすごくよく寝る子だったから、7時に寝たら朝まで寝っぱなしの子だったんです。そういう時に、夜7時だったらまだ外にご飯を食べに出たりできる時間じゃないですか。でも、この子を見てくれる人がいないから、7時から人に来てもらおうと。でも、夜中だけ来てもらうこともできないし、週に3回ぐらい来てもらい、今もそうなんです。その週3が火・木・金なのですが、金は3時から来てもらうんです。3時から夜中の11時か12時まで。金曜日は必ず外に出ようと決めているんです。それで夫婦の時間を確保しようと。夫婦で外に出たいんだけど、出られないから。子どもが起きてる時に出るということはないですが、寝てから人に頼んで出ようと。」

実際に0さんは、後述するように自分で家事を精力的にこなしている。そのため、メイドの採用基準についても、家事能力は二の次で、とにかく必ず約束の時間に現れる信頼性を重視したという。

筆者「では、家事とかの技量ではなく人柄で選んだということですか」

0「最終的にはそうですね。自分の最初の目的も、家事をやってもらいたくて頼んだというより、自分が夜出ていきたいんだけど、この子が寝ている間置いておける人が欲しいというところから始まったので、信用できる人。来るといったら来てもらわないと困るじゃないですか。自分たちはおよばれに呼ばれている、この子は寝ている。スタンバイ。でも来ないとなったら困るから、来ると言ったら必ず来るという人が欲しかったんです」

子どもがいる場合、主婦はたとえ私的な目的での外出であっても制約があっても困難を感じることも多い。それをメイドを雇うことでその制約は大きく解消される。Oさんの場合には、子どもが寝ているときに限ってメイドに子どもを預けているが、ほかのケースではメイドに子どもを預けることで子どもと少し離れることができることを目的とし、さらに自分の活動（ボランティアや習い事、ときにはマッサージなど）で自分の時間を確保するために雇うということもある。

【事例】

Pさんは、精力的にボランティア活動をしている。日本のように、幼児を一日中きちんと預かってくれるような施設はフィリピンでは整っておらず、子どもをみてもらうためにはメイドを雇うしかない。

P「実は仕事をしたいというのがあって。仕事というか、自分の活動をしたいというのがあって。そのためには多分日本だったらちゃんと保育園があって、9時—5時で預かってくれて、6時までにお迎えに行っていくのをやればいいけれども、こっちは公共機関にも乗れないから渋滞によって時間は左右されるし、働いていると、仕事というほどではないかもしれないけれども、そちらをするとすると、今この国ではメイドさんが必要というのは。何か私は他の人とはちょっと立場が違う。じゃなかったらいない、実は。ステイインではね」

その背景には、Pさんは、日中母子で家に閉じこもることによる閉塞感に気づいているという点も挙げられる。とくにフィリピンに赴任した当初は知り合いも少なかったこともあり、危機感を感じていたという。

P「（メイドを）雇いたいと思ったのは、やっぱり知らない国で生活をしなければいけないから、子どもと2人で向き合わなければいけないというのが結構厳しいなあと思ったのね、そのときは。今みたいにプレイグループがあったりとか、そんなに日本人がいるということも全然知らなかったの、取り敢えず家事をやってもらいたいというよりは、2人きりにならないように、ちょっと手伝ってもらえる人がほしいというのはあった。（中略）育児に口を出す割には、子どもと2人だけの生活というのは結構つらくって。（中略）ちょっとそういうときにあやしてくれたりとか、逆に子どもを見ている間に私が家事をしたりとか、その逆だったりとか、そういうのがいいなあって」

フィリピンに住む日本人にとって、夜に子どもを見てもらう、あるいは長時間子どもを見てもらうための援助資源の選択肢は、メイドの雇用にほぼ限定される。

メイド雇用のきっかけと利点：まとめ

このように、マカティ市在住の日本人駐在主婦にとって、メイドの雇用のきっかけは、日本と勝手の違う海外生活において、その不便さを解決する手段として必要であること、緊急時に頼れる親族がいないために必要であること、在フィリピン日本人社会での準拠集団がメイド雇用家庭であること、さらには、家事量が日本よりも多く感じられるときや子どもを見

てほしいときに、利用可能な援助資源として、メイドの存在があり、逆に選択肢はメイドにほぼ限定されるということがある。もちろん、メイドが利用可能な援助資源となるのは、メイドの人件費が日本に比べれば非常に安いからということはいうまでもない（メイドの労働条件については後述）。

3-2-2. メイド雇用にいたるプロセス

対象者がメイドを雇用するにあたり、メイドの探し方、面接の仕方、採用の基準、給料・労働時間などについて、とりあげる。

◎探し方

メイドを雇うにあたって、メイド候補者の情報をどこから得るかということは、そのメイドに対する信用度と直結している。個別に私的領域で外部からの人間を雇うことになるため、財産を盗まれない・傷つけられないことや、弱者である子どもへの悪い影響がないということは常に懸案事項であり、メイドが誰の紹介かということは信用を左右する。

夫側ネットワーク資源の活用

28人の対象者のうち、最初のメイドについては前任者や夫の会社の同僚からの引き継ぎだったというケースは、少なくとも8ケースあった。また、過去に夫が雇っていたケース、あるいは妻が赴任する前から夫が雇っていたケース、夫の会社の同僚のメイドをシェアするケース、夫の同僚が赴任前から採用して用意してくれたケースなど、夫の人的ネットワークをメイド探しの資源として、メイドを採用するにいたるケースは少なくない。それは、夫の人的ネットワークを利用してメイド候補を探す場合、夫の知人や夫が過去にそのメイドを雇用していた実績を信用できるからである。

【事例】

Dさんは、夫の同僚からメイドのシェアをもちかけられて、メイドの雇用をはじめた。

D「最初は、私も来てすぐはメイドさんと住むなんて、ちょっと。主人だけなので、子どもがいたらもう最初からいてもらおうと思いましたけれども、ちょっと様子を見ようということで、最初はいなかったのですが。主人の職場の方に週に2回ぐらいどう？ということで、紹介していただいて。その人が使われていてから、安心して、全然知らない人ではなかったの」

また、赴任直後に知り合いのいない妻に比べ、夫側の会社ネットワーク資源は最初からアクセスできるという点もある。

【事例】

Iさんは、先に見た通り、夫の会社からメイドを雇用するように言われたこともあり、赴任直後からメイド候補探しをはじめ、夫の人的ネットワークから現在のメイドを採用した。

筆者「どうやってその〇〇さん（メイドの名前）と知り合ったんですか」

I「えとね、夫の会社の取引先の人の家にいる、メイドさんの紹介。すごい遠いんだけど」

妻側ネットワークの活用

妻が駐在生活に慣れ、人的ネットワークを広げるようになると、妻の友人からメイドを紹介してもらうことも多くなる。ひとつには、妻の直接の友人が日本に帰任する際に、その友人の高い評価を信用して引き継ぐという形がある。

【事例】

Pさんは、帰任する友人から評価の高いメイドを引き継ぐために、数ヶ月をテンポラリー（臨時雇いのメイド）を雇って待った。

P「親しい友達が帰るというので、その人のメイドさんがすごくいいという話を聞いていて、「じゃあ、その人をお願いします」と言って来たのが今のメイドさん。（中略）でも、帰任するまでの間に2か月あったし、そのメイドさんも1か月は休養をもらって地元に戻りたいと言ったから、3カ月ぐらい待って、その間、そのテンポラリーの人でごまかして」

友人からメイドを引き継ぐだけでなく、友人が信用しているメイドからの紹介という形でメイドを紹介してもらうこともある。

【事例】

Mさんは、フィリピンに赴任してから知り合った友人がそのメイドに職探し中のメイドを探してもらうことで最初のメイドを見つけた。

M「一番最初は、つてがなかったので、お友達の紹介。お友達の紹介というのは、ある程度素性がしっかりしている。例えば、一番最初の子は、お友達が同じレジデンスにいたんですけれども、その人のメイドさんのお友達ということなので、もし、何かそこに問題があったら、その子自体もその家と気まずくなるじゃない。こっちがこっちのお友達なので。だから、その人の紹介ということで来てもらったので、ある程度安心して面接できて。その次からは、その自分の家に来ている子の紹介。だから、情報源は、一番最初は二つだったんですね。〇〇（メイドの名前）と、今日来ていないけれども、△△（別のメイドの名前）っていう子で、この二人が一番最初。それは日本人のお友達からの紹介」

このように、夫の資源を利用する場合と同様、妻の人的ネットワークでも、Mさんの発言にあるように、知り合いの紹介ということに信用と安心感を見いだしている。

さらに、自分自身メイドを雇うようになり、日々一緒に過ごすなかで、そのメイドが信用できると判断した場合には、そのメイドから別のメイドを紹介してもらうというケースもいくつもあった。

【事例】

Lさんは、最初のメイドを友人のメイドの姪を紹介してもらう形で雇いはじめたが、その後はメイドの紹介で次のメイドを雇うことが多かった。現在の2人のメイドは従姉妹同士である。

L「最初に雇った子が、4年ぐらいいたんです。でも、その子は妊娠をきっかけに辞めましたね。その子が別の子、自分の義理の妹になる人を紹介してくれて、その人をお願いしていたんです。22歳とかの若い子で。その子は、小さい子供を働きに出ている、ステイインで雇っていたんですけど、「ちょっと子供を見る人がいなくなったから」ということで退職したんですけど、またその子が紹介してくれた人。何人か面接した中で、その子が紹介してくれた子がよかったので、その人を雇ったんですけど、その人も妊娠しまして（笑）。それからちょっとばたばたしたんですけど、その後、今の彼女が来た感じ。1人目のステイインの子が来たんですけども、そして、3人目の妊娠をきっかけに、今年の4月から2人メイドに。2人ともステイインです」

日本人ネットワークやメイド・ネットワークの活用

自分の直接の知り合いではなくても、知り合いのメイドの知り合い、知り合いの、さらに知り合いのメイドの知り合い…というように比較的パブリックな日本人ネットワークやメイド・ネットワークを利用してメイド候補を探すこともある。その場合には、素性がわからないことも多く、信用という点での評価は低いいため、複数候補から面接することが一般的ようである。

【事例】

Bさんがメイドを探す場合には、複数の候補を集めて面接をして決めるという。

筆者「メイドさんのインタビューっていうのは、すぐに集まるものなのですか」

B「けっこう、どこかのメイドさんの姉妹とか親戚とか、そういうのがいっぱい。声かけると、どっからともなく集まってくる。まあ、期待してても、来ない場合もあるので、何人か集めておいて、来た人だけ面接するという形。一人だけだと、「やっぱり、この人は・・・？」とか、金額が合わなかったりしたら、その場ですぐにOKが出せないから。わたしの場合は何人か集めて面接しましたね」

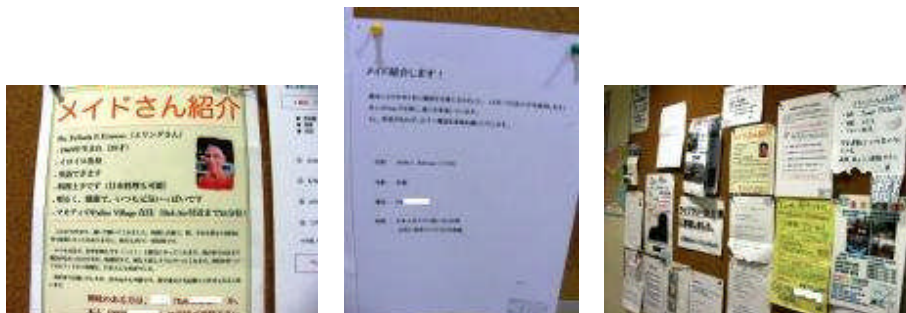
パブリックな情報資源の活用

また、知り合いのネットワークの活用だけではなく、マニラ日本人会の掲示板に張り出される、メイド情報というビラを利用して、メイド候補を探すこともできる。夫の会社ネットワーク、妻の友人ネットワークから信用できるメイドが見つからない場合に、どうしても日本人が紹介しているメイドを雇いたいときには、確実に情報にアクセスできる場である。日本人会の入会に際しては、審査があり、掲示板の利用は、日本人会に入会している人に限られているため、日本人会の掲示板の情報は比較的信用できる情報源とされている。

ただし、日本人会のメイド紹介の貼りだしは、現雇用主がメイドの働きぶりや雇用主の連絡先まで書いて、責任をもって紹介してあるように見えるものから、名前と年齢、本人の連絡先程度の情報しかなく、紹介者が責任をもって紹介しているように見えないもので、実にさまざまである。評価の高いメイドであっても、雇用主の周りで引き継ぎたいというニーズがない場合もあれば、本当は評価の悪いメイドで周りの友人にはおすすりめできないが、日本人会にはりだしてメイドの次の職探しをしてあげたという形をとることで、帰国前にいやがらせをされないための対策という場合もある。また、現在雇用中のメイドに頼まれて、メイドの素性の知れない親戚・知人を張り出すこともある。したがって、日本人会の掲示板を

メイド探しの情報源として利用する場合は、メイドの質は玉石混合であることが了解されていることが多い。それでも、メイド候補を探すための資源が限られていることも多いため、よく利用されている。

写真 日本人会の掲示板におけるメイド情報の貼り出し



【事例】

Gさんによると、現雇用主からの評価が高いメイド情報が日本人会に貼り出されると、日本人からの引く手あまただという。

G「前言ったかもしれないけど、日本人会に貼ってあった、10年以上日本人のところで雇われた経験があって、日本料理がとてもうまくて、お弁当も作ってくれて、っていう人に、その日のうちに電話が殺到したっていうのね、奥様方の。でもその人たちは、自分のお手伝いさんが手元にいる人で、その人に声かけているんだよ」

【事例】

実際に日本人会の貼り出しをメイド候補者探しに利用した、Cさんによる語り。

C「結局、日本人の方に誰かいませんかと聞いて、そうすると、自分のメイドさんの家族にいたよとか、そういう感じです。日本人会に出ている人はすぐに決まっちゃったり、メイドさん自身の要求が高くて、コンタクトしたら断られた人もいたし」

【事例】

また、日本人会に貼り出されたメイドは、メイドに複数の雇用主候補が電話をかけてくることが多いため、メイド候補探しの情報源として疑問符をもつ人もいた。Qさんは、夫の前任者から日本人会の掲示板を利用しないように勧められたという。

Q「前任者には、日本人会に貼ってある人は、みんなすれてるから、高いお金を要求してきたり、日本人慣れして、どうのこうのだから、絶対雇わない方がいいよって。」

メイド探しには複数の情報源の活用を併用することも多い。ただし、より自分に近いネットワークからのメイド候補に信用を見いだす傾向は強く、情報源がよりオープンでアクセス可能になるほど、メイド候補者に対する信用は落ちる。

しかし、時期によっては夫のネットワーク、妻のネットワーク、日本人会の貼りだしでも、

自分が思うようなメイドを見つけられない場合もある。そのような場合には、メイド紹介のエージェンシーを使うことになる。メイド紹介のエージェンシーの情報は、日本人駐在家族がよく利用する『マニラ電話帳』や新聞等に掲載されている。また、フィリピン人によるエージェンシーだけでなく、日本人が経営しているエージェンシーも存在しており、口コミで情報が共有されている。ただし、エージェンシーを利用する場合には、紹介料もかかり、メイド探しの最後の手段として認識されている面があり、本研究の対象者でエージェンシーを利用した人はいなかった。

◎メイドの採用基準・選好

メイド候補者を得られたあと、面接をすることが多い。信頼できる筋からの紹介であれば、メイドも信用できるとして、形だけの面接となることもあるが、ゆるいネットワークや日本人会の貼り出し情報から得たメイド候補者を面接する場合には、複数のメイド候補者と面接をして決めることが一般的である。

面接にあたっての採用基準を尋ねたところ、面接での印象・態度、労働条件、年齢・日本人雇用主のもとでのメイド経験の有無、ニーズに対する適切な資質などが考慮される。

面接での印象・態度

他の職業同様、メイドについても面接での態度や第一印象は重要だという。ただし、実際に面接でメイド候補者が連絡なく現れないことや、指定の時間に遅れること、履歴書を持参しないこと、面接ではおづえをついている等の一般のビジネスにおいて好ましくない態度は、国や出身階層の違いからくる文化的な差異、あるいはメイドという職業が個人の私的領域で働くという、社会においても周辺的な労働であり、労働法も適用されない分野である、といった性質から、しばしば起きうることで日本人のあいだで共有されている。そのため、メイドが一般のビジネスと同じような態度をとること、すなわち面接に時間通りに来る、履歴書を持参するという行為そのものがひとつの評価の対象として機能する。

【事例】

Pさんによると、面接に遅刻せず履歴書を持参する行為によって、日本人雇用主のもとで働く上で適切なメイド候補者かどうかをまず判断できるという。

P「最初に面接する時点で重要視するのは、時間におくれないこと。そしたら、だいたい先に来て待っているような人とか、先についてテキストで「つきました」って連絡が来るような人だと、そのあともだいたい、いままでの経験なら、後れたりとか、あんまりおかしいこと、とんでもないことをやったりとかはしない。履歴書も何も持たずに来て、遅れるような人は、そのあとも問題を起こすと思う」

労働条件

後述するが、メイドの労働条件は日本人雇用主で暗黙に了解されている相場があり、それをもとに面接での交渉によって決まる。したがって、その相場よりもメイドの要求が低い、あるいは高いと判断される場合には採用・不採用の根拠となることがある。

【事例】

Qさんが数人を集めて面接をして、はじめて雇うメイドとして採用した人の決め手は、日給が安く、性格が良さそうだった。

Q「その子は、すごく印象がよかったのと、すごく安かった。」

筆者「その子はちなみにいくらだったの？」

Q「いくらだったかなー。すごい安かったよ。ステイアウトで。一日240（ペソ）とか。じゃあ、いいじゃん。失敗してもその金額でも痛くないしと思って。それで、雇ってみたけどね。でも自分もメイドについて、全然知識がなかったから。でも、ちょっと高くても経験ある方がいいなと思った。」

しかし、18歳と若く、日本人雇用主のもとでメイドとして働いた経験は一切なかったこともあり、結果的に期待していたような仕事をしてもらうことはできなかった。そのため、試用期間でやめてもらった。

Q「お風呂のバスタブをさ、垢がたまるじゃない。「ちょっと汚いからちゃんと洗ってね。こうやってちゃんと洗えば、きゅっきゅっきゅってきれいになるじゃん。洗ってね」って言ったら、「OK, Ma'am」っていうじゃん。でもね、そこ（指図した一部分）しか洗わないの。「え？」って。「全部でしょ？」みたいな。「そこまで言わなきゃだめなの？」みたいな。この「いろんなとこ。棚ふいてね」って言っても。いち言っても、日本人もそうかもしれないけど、1言って10伝わったかなと思って、10言わなきゃ伝わらないんだっていうのを思ったね。（中略）ちょっと思い出せないけど、そういうのがね、すごくいっぱいあったんだよ。（中略）あと、使い方を教えても、使い方が雑なのか、電化製品は次々に壊れていったね。アイロンとかのボタンが壊れたりとか。寿命だったのかもしれないけど。（中略）でもすごく、本当にいい子でね。仕事はできないけど、人間的にすごく。あっちも好いてくれたかなって思うのは。「ごめんね、すごくいい子だけど、やっぱり雇えない」って言ったときに、涙の別れだったの。「なんで？」って言われて。でもなんでって言われてもちょっと。（仕事が）できないとは言えなかったけど。（中略）すごく仕事遅かった。丁寧だから遅いとかいうレベルじゃなくて。すごく遅かったね。一日家の中を一通り掃除してもらいたいけど、8時間じゃとてもとても終わらなかったね」

また、メイドが要求する金額が雇用主に受け入れられない場合には当然、採用とはならない。

【事例】

Mさんが面接した候補者の中には、面接で雇用主からもらっている自分の給料の額を大幅に嘘をつく人たちがいた。その額はMさんが思う給料の額からはかなり高いものであったため、採用しなかった。

M「日本人の家庭で経験を積んでいけば積んでいるほど強く出てきます。ほかの人たちの面接ですごいふっかけられたこともあります。日本人会のクリニックの先生が日本に帰る時に、そこで住み込みの子が二人いたんですね。同じコンドミだったので、私はその人を知らなかったんですけども、インタビューはしてあげようと思ってインタビューし

たら、一人ずつ聞いたんですけど、「月に1万もらっている」って言ったんですね。(中略) こっちとしては、日本人会の先生だから、もう、パパもママもドクターなので、家にもいないこともあるし、もうずっと子供も預けっぱなし、家のことも預けっぱなしでやっていたらしいといううわさは聞いたので、ああ、だからいっぱい払っているんだって、私は、その時に納得したんですけど。でも、「うちはそれまで払えないから」というふうにお断りしたんです。後から友達から聞いたら、そこは4,500だったんです。「私、直接本人に聞いたから」って言われて。だから、平気でふっかける人もかなりいる。経験があれば経験あるで、日本人家庭で経験があればあるほど、日本人は言えばやってくれると思うのが手ですて、あともう一つは、日本人経験があるということ新しいママは喜んでくれるからというのでふっかけてくる人はいます。1万にはちょっとびっくりしましたね(笑)」

年齢および日本人雇用主のもとで働いた経験

年齢や日本人雇用主のもとで働いた経験があることを重視するかは、気にしない人もいる一方で、気にする人も多い。多くの場合、若い人は日本人雇用主の下で働くことがはじめてであることも多く、ある程度日本人雇用主下でのメイド経験を積んだ人であれば若くないこともある。

◇年上／日本人雇用主経験が長いメイド

日本人経験を積んだメイドの場合、日本人の家事の勝手がわかっていることが多いため、自分で教えるという手間がかからないことが利点としてあげられる。

【事例】

Dさんは、日本人経験が長い方だったおかげで、安心して任せられたという。

D「私はすごく若い子よりは、そういった年の人のほうが安心できるというか、私はそっちのほうがいいかな。若い子でもしっかりした子はいるけれども、教えないと掃除の仕方わからない方もいらっしやると結構聞くので、その点はある程度いろいろなメイドをされている人だったら任せられたので、最初から。その点は楽だったかな」

しかし、逆に日本人経験が長いメイドは、雇用主の好みの家事スタイルに合わせない可能性がある。

【事例】

Rさんは、メイドを雇うにあたり、4人と面接した。そのうち2人は40代だったが、40代の人を選ばなかった理由として次のように話した。

R「家政婦さんの経験が長い方って、もう自分のやり方がこうだっていうのがあるっていうのも聞いていたのもあるんですけど、もうわたしがこうだってやり方でされると多分わたしの性格上それは気に入らないと思うんですね。多分極端な話をすると、洗濯物、色物、柄物、子供のもの全部一緒にわたしは今まで洗ってきましたって言われてもわたしは分けてくださいって。せめて子供のものと大人のものとか色物と白物そんなに細かく分ける必要ないけれども、そこくらいまではして欲しいなと思った時に、彼女がガンと

して譲らなかったら、わたしはそこでもうきつともう彼女を雇い続けるの無理なんだろうなっていうのがあったので」

◇年下／日本人経験がないメイド

年下や日本人経験がないメイドを好む場合には、日本人の家事スタイル（雑巾一枚ですべてをふかないことや電化製品の使い方等）を教える手間が必要にはなる。

【事例】

Lさんが日本人経験のないメイドを最初に雇ったときの話。

L「（日本人雇用主のもとで働いた）経験がないと、掃除の仕方から違う。最初に来た子とかは、木の床なんだけど、もう泡だらけにしてしまったりするので、そういうところも教えないといけないし、「うちは土足では生活していないし、子供も床を這うから、あなたもここでは土足はしないで」とか、そういう生活習慣も教えないといけないから、日本人が初めてとなると、「ちょっと安くスタートしてもいい？」っていう感じになっちゃうかな」

しかし、年下であれば、注意や指示が出しやすいと感じる人もいる。

【事例】

年下あるいは日本人経験がないメイドがよいというMさんとBさんは次のように語る。

M「年齢は気にしています。自分より年下がいいです。それは、指示しやすいので」

また、自分自身がはじめての日本人雇用主になる場合、自分の家事スタイルを教えることができる。

【事例】

Bさんは、現在40代のメイドの使いにくさから、過去の若いメイドたちの方が良かったと感じている。

B「年齢は、若い子の方が良かったですね。最初の子も、二人目の子も日本人経験がなかった子なんですけど、20代で。自分の色に染めるじゃないけど、日本人はこういう感じなんだなって思ってくれてたと思うんですけど。彼女（現在のメイド）は日本人経験があって、でも、「あそこの家はこうだった、ああだった」って」

ただし、年齢が若いメイドが夫と同じ生活空間で過ごすことへの警戒感から、若いメイドを雇わないというケースもあった。

【事例】

Gさんは自分より年下は絶対に雇わないと決めている。「わたしのなかでは、やっぱり女性だから」「基本的に家族ではないから、男と女だし。女禁なんだよ」というように、とくに若いメイドが夫と同じ生活空間にいることを嫌うからである。

G「そりゃ男と女だもん。くだらないこだわりかもしれないけど、若い人は雇わない（笑）。

色気のある人は雇わない」

◇ニーズに適切な年齢

さらに、子どものいる対象者では、子どもの世話というニーズに耐えられるか、という点も考慮に入れている場合が多い。その場合、体力が必要な点で若さを求める反面、子どもの相手を責任をもってできる点から若すぎるメイドも良いとはされない。

【事例】

Nさんは、夫の会社の同僚から引き継いだメイドの年齢が、自分の家庭のニーズに合っていたと語る。

N「日本人についていた人で、できれば子どもを見て欲しいので、少しわかめの方がいいなって思ったんですけど。本当に若いと困るし、みたいな。ちょうど運良くいいくらいなのかな。年上だとたぶん、言いにくそうな感じはありますよね」

筆者「若すぎると困るっていうのは、何か理由がありますか」

N「まあ、経験が足りないとか。体力だけじゃ、ちょっと困るかなっていう。何ていうんだろう。子どもと遊ぶのでも、変に囲い過ぎちゃう人も困るし、変にオープン過ぎちゃうっていう、野放しなのもいやなので。子どもは言葉が全然通じないから、やっぱり子どものことを考えて、その立場に立てるような年齢くらいがいいかなって」

ニーズに対する適切な資質

各家庭で、メイドに求める条件が異なる大きな理由は、ニーズの違いである。それはときには、家族構成が変化するにつれて、メイドに求める資質も変化していく。それは先に挙げたような年齢だけでなく、またメイドの家事能力（料理ができるか、子どもの世話ができるか等）に限らず、メイドの性格だったり、メイドの家族構成だったりもする。

【事例】

Lさんは、子どもが一人だったときにはメイドに求める資質は家事能力と存在感を感じさせないことだったが、子どもが3人に増えた現在、子どもの面倒を見てもらう機会も増えたため、メイドに求めることは家事能力よりも性格の良さだという。

L「家族構成が変わると、メイドさんに求めるものも違うというか、前は、子供が1人だった時には、メイドさんは空気のような感じでいいと。もう、家事だけ済ませてくれたら、子供の面倒もしつけも全部私がするから、子供に話しかけてもくれなくていいって最初の1人目の時には本当に思っていました。でも、今は接してもらう時間が長いから。（中略）実際、今、2歳半の子が、ちょっとずつ英語が出てきて、英語の歌をすごい歌うようになってきて、それは、2人いるうちの1人のメイドさんの影響だと思うんです。すごいその子はおしゃべりだし、よく歌ってくれるし、よく話しかけてくれるけれども、もう1人は全然歌も歌わないし、あんまりしゃべりかけないので。（中略）家事はしゃべらない子の方がほとんどしてくれるんですよね。でも、子供のためにしゃべる方の子を選びたいかなあ。前は家事だけを求めていたけれども、今は子供に接してもらうことも期待しているかも。子供へのメイドさんの影響。（中略）今は、私にとっては、家事の能

力よりも子供への接し方。家事は「これはこうして」って言えば直せるじゃないですか。でも、子供への接し方とか性格とかは直るものじゃないし、今、2人いて揉めているというのが、1人の子が、ちょっともう1人の子に意地悪なような気がするんですね。もとからいの子が新しく来た子に対してちょっと意地悪な気がするんです。それを知ってしまうと、もとからいの子は、すごくよく仕事もしてくれるし、家事は文句ないし、子供もよく見てくれていたんだけど、ちょっと意地悪な面を見ちゃったら、何か、子供を預けるのが嫌になってしまっ

【事例】

Jさんは、最初のメイドが無断で仕事に来なくなることがしばらく続いたために解雇し、新しいメイドを雇用するため2人の候補者と面接をした。その際、メイド本人が実生活でも子どもの世話をした経験があるかという、メイドの家族構成を重視して現在のメイドを採用した。

J「二人面接をして。一人の人は結婚してるんだけど、子どもがいなかったのね。彼女は子どもがいて。わたしが妊娠していたから、のちのちのことを考えると、子どものお世話も経験している人がいいよねって」

ほかにも、妊娠・出産にあたって、料理ができるメイドと子どもの世話ができるメイドを二人雇うことにしたHさんなど、新しいニーズに見合うメイドを雇いなおすということはしばしばある。メイドにも家事の好き・嫌いがあり、料理も子どもの世話もすべての家事をこなすオールラウンド・ヘルパーから、料理ができない、子どもの世話はできない、といった長所短所があることが多く、それらはメイド本人が自己申告により面接において述べることも多い。それらを判断材料として、自分のニーズに見合うメイドを探し、試用期間中にメイドによってニーズが満たされるかどうかを確かめるという段階へと入る。

ただし、面接の際に、信用できてニーズに見合うメイドを見極めることは大変難しい。メイドが仕事を得るために好きではない家事、できない家事を隠す、あるいは嘘をつくケースもある。そのため、試用期間が1~2ヶ月（人によっては3ヶ月）設定され、メイドの仕事ぶりを見極めることになる。

【事例】

Pさんが最初に雇ったメイドは、19歳という年齢でシンガポールに半年間出稼ぎに行った経験から中華料理ができると面接で話していた。しかし、いざ雇って作ってもらったところ、料理はまったくできないことがわかった。

P「日本料理は作れないけれども、シンガポールにいたから中華もできるし、フィリピン料理はもちろんですみたいな感じで言われて。初めてだから何か作ってもらおうと思って一緒に買い物に行って食材を買ったら、すごく困っているのね。私も今よりも言葉ができないし、何で困っているのかをよく聞けなかったのだけれども、結局買ってきて作ってもらったのはインスタントラーメン（笑）」

逆に、面接では印象が悪くても、実際には仕事ぶりも相性も良好ということもある。

【事例】

Gさんは、妊娠による悪阻のひどさから週3回の通いのメイドに加え、そのあいだを埋めるために週4回の通いのメイドを探した。面接では、のちに雇うことになるメイドに対する印象は良くなかったという。ベビーシッターの経験が数年あるだけだったが、条件に見合う人ということで仕方なく採用した。

G「しいていえば、いまの彼女（雇用中のメイド）は第一印象はあまりよくないの。面接の雰囲気とかも、すごくふてぶてしくて（笑）。まあ、プライドも高い人だから、しょうがないんだけど。ほかは、雇って欲しいからお願いしますっていう、ぺこぺこした姿勢が感じられたんだけど、彼女はお手伝いさんとしての経験もそんなにないし、なんかね、「あ、そうなの？ふーん」みたいな感じで。インタビューもこんな感じでさ（肩肘をついて、あごをのせる）。「なんだよー」って思って。「まずそのひじをなんとかしなさい」みたいな。なんか気に入らなかったんだけど、でも（悪阻で）それどころじゃなかったから。こっちの条件を呑んでくれるんだったらいいやと思って。だめだったら、また（試用期間の）1ヶ月で切っちゃったらいいやと思ってたんだよね。しいていうなら、彼女が第一印象は悪いところからスタートしている」

しかし、結果的には性格的な相性が合い、現在では住み込みに切り替えて、今後も長くやっていきたいと思うようになっている。もちろん、メイドの仕事ぶりも評価してのことであるが。

G「まだまだ本当の信頼関係ができていいがたいんだけど、相性は悪くないからがんばれる。がんばれるというか、やっていける。あとは、過去も長く勤めている人だから、うちでも長く勤めて欲しいなあと思える人かな。とにかくでしゃばらないから。私とかけっこうキャラが濃いからさ。相手がキャラが濃いとやっぱりでしゃばっちゃうんだけど。でも彼女自身は、やっぱり自分が自分がついていう感じの人じゃないから」

つまり、メイドの採用に際しては、面接でできるかぎりニーズに見合う人を探そうとするけれども、面接だけではわからないことが多い。

以上のように、メイドの採用基準・選好についてはさまざまな条件が設定される。その場合、比較的はっきりと提示されやすい家事能力（たとえば和食を作れる、子どもの相手が得意、等）は各世帯のニーズによって考慮されたりされなかったりする。一方、標準化されやすい家事（掃除や洗濯、アイロンかけ）については、能力ではなく経験を積めば誰でも一定程度はできるものとして了解されているため、面接ではとくに考慮されないことが多い。そのため、家事能力の高さの指標は料理と子どもの世話に限定されることが多く、あとは労働条件、属性（年齢・家族構成・性格）、そして雇用主との人間同士としての相性を複合的に判断して、ニーズに見合うメイドを雇うことになる。

3-3-3. メイドの労働条件

では、フィリピンにおけるメイドの労働条件はどのようなになっているのか。本節では、まず労働法におけるメイドについての労働条件の規定を述べたあと、一般のフィリピン人家庭と日本人駐在家庭の場合を紹介する。

◎労働法における規定

フィリピンの労働法では、ヘルパーの労働条件の規定は、一般労働者とは別に定められている。フィリピンでは、メイド・ドライバーを含む家庭内使用人は次のように定義されている。

家庭内あるいは世帯内のサービスとは、雇用主の家庭において、生活の維持やそのサービスによる楽しみのために、通常必要不可欠、もしくは望ましいとされるサービスを意味する。それは、個人的な快適さや雇用主の世帯成員にとって好都合であるように仕えることを含み、ファミリードライバーによるサービスもここに含まれる。

つまり、法律上の定義では、メイドは雇用主の生活と利便性のために仕える存在であり、どの種類の家事をするかどうかということには一切触れられていない。また、最低賃金は月に550～800ペソ（地域による、マニラ首都圏は800ペソ）、食事、生活、医療は雇用主負担と定められており、月給が月に1000ペソを超える場合には、雇用主はメイドにSSSと呼ばれる社会保険制度の雇用主負担分を払う義務が生じる。また、労働時間・休日に関する規定はない。

雇用期間の終了については、雇用期間を決めて契約をしている場合には、雇用期間途中での理由なき解雇は未支払いの給与プラス補償として15日分の給与を上乗せして支払うこと、雇用期間途中で正当な理由なくメイドが離職する場合には、15日を超えない分の未支払いの給与が没収されること、雇用期間を設定せずに雇用を開始し、その雇用関係を終わらせる場合には5日前に通告すること等が定められている。

◎フィリピン人家庭の場合

Arnald(2003)によると、フィリピンの中産階級の、稼ぎのある女性は、地方から都市に出稼ぎにきた、非熟練・低学歴の若い女性をヘルパーとして雇う。典型的な中産階級の世帯では、1人か2人の住み込みヘルパーを、月にUS20ドル～40ドルで雇う。中産階級の稼ぎのある女性は、自分のヘルパーの9倍以上を稼いでいる（Arnald 2003:156）。

筆者が調査あるいはインフォーマルに得た情報では、マカティ市におけるフィリピン人家庭の賃金の相場は月1000～3000ペソ（約20～60ドル）で、食事は雇用主から支給される。労働時間は、早朝～深夜におよび、休日はないか、月1回という話を耳にした。ただし、上層階級では、複数のメイド、使用人を雇い、料理、洗濯、掃除、アイロン、ヤヤ（ベビーシッター）、庭師ほかと家事の役割分担がなされている。

◎日本人駐在家庭の場合

以上見たように、法律では、給料、労働時間、休日などの規定は本当に最低限しかない。マニラのフィリピン人家庭で月に1000～3000ペソで雇われているのが相場であるように、日本人のあいだでもある程度の労働条件の「相場」とされるものがある。

フィリピン編集部が2006年に90人のマニラ駐在主婦に行った調査によると、住み込みのメイド（49ケース）の給料（基本給および諸手当）は4000ペソ台（12ケース）から10,000ペソ台（1ケース）まで幅広いものの、5000ペソ台（17ケース）、6000ペソ台（11ケース）に集中して

いる。通いのメイド（13ケース）でも、月給で5000ペソ台（4ケース）から10,000ペソ（1ケース）と幅広いが、交通費が必要な分、住み込みよりも若干高く支払うことが多いとされる。また、週2回か3回のパートタイム、さらに一日8、9時間のフルデイ（日給300-370ペソ）や、3、4時間のハーフデイ（220ペソ〜）といった雇用形態もある。

本研究の調査対象者のあいだでは、もっとも安い人で4000ペソ台（住み込み）、もっとも高い人では13000ペソ台（週3日通い、残業代別）とさらに月給の幅広かったものの、多くは5000ペソ台から8000ペソ台であり、そのあたりが相場といわれている。日本人から日本人へと引き継がれている（信用がある）、日本料理など特殊技能があるメイドは、給料が高めである。また、高級コンドミニアムが集中するR地区は、S地区やM地区よりも給料の相場が高いとされる。またメイドを複数雇う場合には、仕事が分担されるために給料は低くなることもある。

日本人のあいだでは、給料については、基本給に食費や交通費といった諸手当をつける場合が多い。手当をつけずに、必要な食料品や日用品を物品で支給する場合や、米のみを別に支給する場合など、手当の付け方はさまざまである。これは、日本人駐在家庭では、日本食材店などで割高な日本食材を購入して日本食を用意する機会が多いため、フィリピン人のメイドの口に合わないこと、さらにメイドの食費として高くつくからである。日本人家庭で住み込みのメイドとして働く場合、メイドは自分で食料品を買い、自分の料理は自分で用意することが普通である。それは料理ができるメイドであっても、基本的に雇用主の食事（日本食）と自分の料理を分けてつくることが多いようである。

その点が、フィリピン人家庭の一般的な労働条件ともっとも異なる点であり、日本人家庭で働くのがはじめての場合にはメイド自身が戸惑うこともある。

【事例】

Mさんが雇った二人目の住み込みのメイドは、それまで日本人雇用主のもとで働いたことがなかった。Mさんは食費手当込みで給料を払い、それとは別にフリーライス（お米は必要なだけ支給）を手当としていたが、メイドは日本人家庭での自分の食事を用意する勝手がわからず、結局Mさんが彼女に食事を作ってあげるようになった。

M「その子はお米しか食べてなくて、おかずは全然食べてなかったんですよ。「冷蔵庫をこの部分使っていいよ」と言っ。1人目のステイの子は、前の日本人の家で長く勤めていたので、同じように、1週間分の自分の食料、野菜とか、卵とか、お肉とか、魚とかを、ちゃんと買ってくる時に1週間分買い込んできて、これぐらいのスペースなんですけれども、その分冷蔵庫に入れていて、少しずつそこから料理をしながら食べていたので、それが普通だなと思っていたら、新しい子（日本人経験がないメイド）が来て、鍋がないというので、鍋は与えたんですけれども、「おかず、ここへ入れていいよ」と言っても、いっこうに使わないんですよ。どこにもなくて（笑）。ある時見たら、御飯だけで。御飯はおかわりして、インスタントラーメンだけ、何の具材もなくて、余りにもかわいそうで、1週間たつと、もうふらふらなのね、彼女が。（中略）お金を渡してもだめだからということで、それが発端で、夕御飯は彼女の分もつくってあげて、夕御飯はなるべく大目にあげるようにしたら、それをちまちまと、残ったら次の日のお昼に食べてみたいな。結局、食費はかかっていないと思うのね（笑）」

多くの日本人がメイドの給与以外についても労働条件を面接で交渉する。なぜなら、先に

みたように労働法には最低限の取り決めしかないからである。交渉に際しては、夫の前任者や知り合った日本人から情報収集して手探りで労働条件を交渉することが多く、それに基づいて交渉し、労働条件の相場ができあがっていくため、契約内容は各家庭でそれぞれ少しずつ異なってくる。

【事例】

Sさんは、会社の資料に

住み込み・洗濯・掃除 5,000～7,000ペソ/月

住み込み+料理 6,000～8,000ペソ/月

ステイアウト（通い） 5,000～6,000ペソ/月

と書いてあったことから、週3日の通いのメイドを雇うにあたり、月6000ペソを週3回で計算したために、現在のメイドの日給を500ペソとした。しかし、のちに一日500ペソは日本人相場(350ペソ-400ペソ) より高いほうだと知ったという。

つまり、メイドとの交渉にあたり、どの情報を参照するかということによって、労働条件の交渉が異なってくるのである。基本給や食費の取り決めのほかにも、クリスマスボーナスとして1ヶ月分の基本給の額を支払うということも日本人雇用主のあいだでは非常に一般的であり、メイドも期待している。また、メイドが雇用期間を終えて退職する場合には、1ヶ月分の基本給にあたる額を退職金として支払うことが慣例となっている。ただし、それについてもどの情報源を参照するかによって契約内容は異なってくる。

【事例】

Kさんは週3回のパートタイムのメイド（日払い）に毎年クリスマス・ボーナスをわたし、さらにプレゼントをあげている。それは日払いのパートタイムであっても、月計算してボーナスをあげなければならないと人から聞いたからである。一方、Dさんは、Kさん同様、パートタイムのメイド（日払い）が週2回来ているが、月払いではなく日払いで雇う場合には、ボーナスも退職金も必要ないと人から聞いており、クリスマスにはプレゼントをあげるだけである。

また、週休1日あるいは1.5日を保証し、祝日を休みにすることも、日本人雇用主のあいだで一般的にみられる労働条件である。また、人によっては1年間以上働いたら1～2週間有給休暇を与える、島への帰省費を補助する（または全額支払う）、あるいはメイドからのリクエストで炊飯器や扇風機をメイド部屋にそなえつける、米や石けんやシャンプー、トイレトペーパーなどの物品を与えることもある。このように、労働法で定められないとしても、給料以外での契約に盛り込める項目はさまざまなバリエーションがある。それらはすべて、どの情報源を参照するかにより、さらに面接での交渉次第で、契約に盛り込まれたり盛り込まれなかったりする。契約に盛り込まなければ、それらを実行しなくても違法ではない。ただ、日本人のあいだでのある程度の相場となっている労働条件からかけはなれた条件（たとえば、フィリピン人家庭と同じ条件で雇う）であれば、日本人経験があつて優秀なメイドを雇うことはできない。そのため、面接での労働条件の交渉は、雇用主にとってもメイドにとっても大変重要なものである。

【事例】

Pさんは現在のメイドを雇うにあたって、当時でも比較的高い月給（7500ペソ）のまま引き継ぐという条件のほかに、休暇で帰省するときの帰省費（2000ペソ）、ボーナスの支払いなどを契約に盛り込むことに合意した。優秀で子どもをまかせても安心できるメイドを雇うために、メイドのリクエストを聞き入れたのである。

P「帰省するときの交通費も、それは希望なので出してほしいですと言われて、ボーナスもちゃんとほしいですと言われて、最初から条件をポンポンと言われて、それは全部納得のいくものだったからのんだという感じ」

以上のように、フィリピン人家庭とは異なる、独特の取り決めが日本人コミュニティで共有されており、それらをもとに日本人雇用主とメイドの交渉によりメイドの労働条件が決められる。

4. メイドへの家事の委託と私的領域の変化

フィリピン・マカティ市に在住する日本人の主婦がメイドに家事をどのように委託しているか、そしてそれによって私的領域および主婦を取りまく環境にはどのような変化が生じているのかを検討する。

4-1. メイドへの家事委託の程度

では、実際に対象者はどの程度、メイドに家事を委託しているのでしょうか。まず、メイドに家事を委託している程度が大きいと思われる事例と、逆にメイドに意識的に家事を委託していない事例を紹介する。その後、メイドに委託しやすいと思われる家事とメイドに委託しづらいと思われる家事について、対象者の語りを元に検討する。

4-1-1. どの家事をどの程度、メイドに委託するか

メイドを雇用するといっても、どの家事をどの程度メイドに委託するのかということは、それぞれのケースでさまざまなバリエーションがある。ここでは、メイドに積極的に家事を委託している事例と、メイドを雇用しながら積極的に家事を委託してはいない事例を紹介する。

【事例】

Fさんは、妊婦の身で赴任し、マニラで出産することが決まっていた。ちょうど、夫の前任者から優秀で信用できるとお墨付きで、住み込みのスーパーメイドを引き継いだ。出産後の現在は、掃除、洗濯、アイロンかけから買い物、料理にいたるまで、メイドに家事を委託している。メイドは献立を自分で作成して料理することもできるが、時間があるときは木曜と一緒に献立をたて、その献立に従ってメイドが必要な食材を買い出しリストとして書き出す。そして、金曜の午前中にメイドにお金を渡し、メイドが一週間分の食材を買ってくる（おつりのチェックはFさんがする）。そして、メイドが献立にしたがって、一週間朝・昼・晩と食事を作っている。Fさんによると、メイドは「本当に料理が上手」で、Fさん自身もいまでは

「お台所も任せちゃっているのどこに何があるのかいまいち分からなかったりとか。おおざっぱにしかここに調味料があるぐらいしか分かんないので」というように、台所を把握する必要がないほどである。そして、「家事全般は基本的にお任せして、わたしがむしろお手伝いさんみたいな感じで。お手伝いさんをお手伝いみたいな」「居なかったら暮らしていけないぐらいになって」というほど、メイドに家事を委託して生活している。

筆者「先ほどのお話だとお手伝いさんにほとんどの家事を任せていて、任せていない家事はあんまりない？」

F「そうですね、大体全部やってもらっているかな」

筆者「最初からですか」

F「最初からもうそういうふうを決めちゃってました。家事は任せて、わたしは子育てに専念しようと思って、この際。こんなチャンスは二度とないから」

その結果、Fさんは自分を「専業主婦」と自称するほど、生まれたばかりの赤ちゃんの世話を専念できていることに満足している。ただ、メイドは子どもの世話も上手であるため、食事中や来客があるときには、メイドが赤ちゃんを上手にあやしており、子どもの世話という面でも関わっている。

【事例】

0さんは、週3日、通いのメイドを雇っている。前述したように、もともと子どもが夜に寝たあとに外出するために、寝ている子どもを見てくれる人が欲しかったことがきっかけでメイドを雇った。現在、0さんは「基本的に、部屋の掃除と洗い物とか洗濯をお願いして、子どもに関することは自分で絶対やるというか、寝かせること、迎えに行くこと、食べさせること、ご飯を作ることは任せていない」という。洗濯機を回すのも、買い物も自分でやる。メイドがやることは、アイロンかけ、洗濯干し、掃除、靴磨き、スーツケースを洗う、エアコンの掃除、そして夫婦が外出している間、寝ている子どもとともに留守番をすることである。

0さんは、子どもの家事参加を重要な教育の機会ととらえ、そのためにはまず母親が動く姿を見せることが必要だと考えている。

0「家事そのもの自体で見ればそうかもしれないけれども、子どもの教育ということ考えるとどうなのかなというのが。私は本当に個人の意見ですけども、やはり、子どもが社会に参加していく、社会の中で使える人間になるには、家庭の中で臨機応変に動けるといって、機転の利く子になるような訓練をしていかないと社会に出た時に役に立つといふか、状況を見ながら、私はここで手伝わないといけないというふうにパッパと機転の利く子になるには、やはり家庭の中で育てられていくから。家事といふか、子どもを家の仕事に参加させるという意味では、親じゃないと難しいのではないかなと。お手伝いさんを雇うと、家事なのか、子どもを世話する人なのかというのがすごくあいまいになって、日本のお母さんたちもそうですが、そのうちだんだんと子どもの世話もその人たちに頼むということになってくると、どうなのかなと思ったりするんです」

0さんは、メイドに家事を委託する程度にブレーキをかけ、「家事はほかができるけれども、人を雇うことによってそのラインがずるずるずれていって、親としてやるべきこともその人に頼んでしまうようになる」ことに陥らないように、自分を律している。

0「楽なんですよ，人に頼むほうが。私もすごくこの生活は楽で、人が家事をやってくれると思うとすごく楽なので、その楽さに甘えてだんだん墮落していかないように、絶対自分の子どもに関しては頼まないと決めているというか。やはりずるずるいっちゃうのが怖くて。そういうところで週3でやると決めました」

メイドを雇用して家事を委託するといっても、このふたつの事例のように、その程度には大きな幅がある。メイドの能力が高く、信用ができ、また雇用主の側に家事を積極的に委託したいというニーズがあれば、(育児も含めて)作業としての家事はメイドによって代行されるものである。一方で、家事に作業以外の意味(0さんの場合は子どもの教育の機会)を見いだす場合には、家事の委託は困難となる。

4-1-2. メイドに委託しやすい家事＝標準化された家事：アイロンかけ，食器

洗い，掃除，洗濯

本研究の対象者がメイドに積極的に委託している家事としては、アイロンかけ，食器洗い，掃除，洗濯干しである。本研究の対象者でも、この4項目についてはメイドに家事を委託している。

メイドは、たとえ日本人家庭で働くことがはじめてだとしても、フィリピン人家庭でのメイド経験がある人がほとんどである。アイロンかけ，食器洗い，掃除，洗濯干しについては、料理や子どもの世話にくらべると、各家庭の差異が少ない傾向があり、これらの標準化しやすい家事はメイドに委託しやすい。

アイロンかけや掃除はとくに標準化されやすいものといえる。掃除に関しては、フィリピン人の家庭ではすべて一枚の雑巾でふくことが一般的であるという言説が日本人のあいだで共有されており、最初に雑巾を床用，家具用，子どものおもちゃ用…というように分けて使うように指示する方が良いとされてはいるものの、作業としては比較的、文化的な差異が少ない家事である。

◎アイロン・掃除

アイロンかけや掃除については、メイドのやり方が日本人主婦のニーズ以上の仕上がりであるときもある。

【事例】

Rさんは住み込みのメイドを雇っている。掃除とアイロンかけについては、「自分ではやろうとは思わないですけど」というほど、メイドは徹底的にやる。

R「彼女(メイド)の場合、わりとそんなに仕事のスピードは早くはないんですけど割と丁寧に仕事をするんですね、ここを掃除する時も子供用のプレイマットがあるんですけど、一つ一つ全部分解してアルファベットが中に抜けるようになっていんですけど、アルファベットも全部抜いて、ふきんで掃除したりするんですね。で、わたし一人でここで掃除をすると、そこまで絶対もちろんやれないですし、そんなの気にしたこともないん

ですけど、そこまでするのかっていう。で、アイロンあてても、靴下にまでアイロンかかってかえってくるんですよ。アイロン、パンツにまでアイロンかかっているみたい。ちょっと軽いショックを覚えましたね。アイロンあてるものなの、下着に？っていう」

◎洗濯

洗濯に関しては、干すという作業は対象者全員がメイドに委託していた。ただし、洗濯物の仕分け、洗濯機を回すことについては人によっては自分でやっている。それは、洗濯に関して、メイドの作業と対象者が望む作業にずれがあるときである。

【事例】

Bさんは、メイドの洗濯の方法を好まないために、洗濯物を回すことは自分でやるようになった。

B「掃除、炊事、洗濯は、回すのはわたしが回します。ていうのは、やり方が気に入らなかったのね。白い物は白い物でブリーチをいれて、たらいにいれて、そのままほっておく。それがいたむような気がして、やめてっていったんだけどやめなくて。たまにさ、靴下のこのちょっと黒い部分とかあるでしょ、あそこが白くなってまだらになってるとかさ。そういうことがあるんで、いやだなんて思って。もう洗濯機に入れるのは自分でして、色分けして洗って。そのあと干してもらって、アイロンかけるのは彼女にまかせて。クローゼットにいれるまで彼女に任せています。」

【事例】

Wさんは、衣料にシミがある場合には自分で先に下処理をしている。

W「あと、ちょっとシミとかつけたときとかも、ちょっと声かけたりした。気にしないでバンバン、全部入れちゃうとき、結局、洗いあがったものさ、汚れたまんまじゃない？ここをシミつけちゃったからとかいうときは、自分で液を、もうつけておいたり。これ、つけておいてあるからねとか言ったりして。」

【事例】

ウールのスカートをはかの衣料といっしょに洗濯されて、穴があいたという経験があるEさんは、洗濯物の仕分けは自分の仕事となっている。

E「洗濯で、ちょっといいもの、服とか、いつもだめにされるので。ちょっといいものは、クリーニングに出したりとか、わたしが洗うようにって主人に言われるので、わたしが洗ったりしてますね。」

もし、主婦および家族がブリーチのシミができることや汚れのシミを気にしない、あるいは普通の洗濯に耐えうるような服しか着ないのであれば、メイドに洗濯を全面的に委託することは容易である。しかし、洗濯物を納得いく仕上がり具合にするためには、家事の作業は複雑になってメイドに委託できない部分となり、主婦の仕事となる。

また、洗濯物のうち、下着についてはプライバシーにかかわる部分でもあるため、当初は洗濯を任せることに躊躇したと話す人もいた。

【事例】

Lさんは、当初はメイドに洗濯物を洗ってもらうことに抵抗があり、下着は別に自分で洗っていたという。しかし、

L「最初は、家族の洗濯物を人に洗ってもらうのも何か抵抗があったし。(中略)」

筆者「先ほど洗濯物をもらってもらうことに抵抗感があったというのは？」

L「抵抗はありましたよ。あったから、最初は、下着は自分で洗ったりしていました。でも、結局、干す場所是一緒で、知らない間にもう取り込まれていたりするじゃない。今はもう本当に全部、洗濯が終わったものをクローゼットに入れてもらったりとかも頼んでいるんだけど。最初はもう、洗濯して、アイロンだけ当ててもらったら、しまうのは自分で、もう、クローゼットは全部開けないで、みたいな感じでやったりしていましたね。最初は抵抗がやっぱりあったから」

BさんやLさんのように、洗濯物をクローゼットにいれるところまでメイドに委託している人もいる一方、メイドに頼まずに、たたんだ衣服を自分でクローゼットにいれる人は少ない。

【事例】

Gさんは、貴重品の管理という理由で、洗濯物をクローゼットにいれる役割は自分の仕事としている。

筆者「洗濯物をたたんだあとに、全部彼女（メイド）がなおすのですか」

G「ううん。クローゼットの脇に机があるんだけど、マスターベッドルームに。その机の上に置いてもらって、私が戻すようにしているんだ。ワイシャツだけは、ワイシャツだけのクローゼットがあるから、そこだけはあけてもいいからっていうことにしてあるから、それだけはもどしてもらってるんだけど。あとは、貴重品が入っているクローゼットもあるから。そこは鍵付きだから、いかにも貴重品が入っているのがわかりやすいクローゼットだから、そこをあけられるのもいやだから。洗濯物はあの机の上に置いてもらってるかな」

以上のように、家事のうち標準化されている作業については、メイドに委託する傾向が強い。一方、洗濯に見られるように、対象者にとっての望ましい作業とメイドの実際の作業に差異が生じる場合には、メイドに委託できないので、主婦の仕事となる。また、他者に見られたくないようなプライバシーにかかわる部分（下着の汚れや貴重品の場所）が家事の作業と関連する場合にも、家事を委託することへの躊躇を生じさせ、主婦の仕事となる。

メイドの作業のやり方に介入が必要と判断し、ある部分の家事についてはあえて任せることはせずに主婦自らの仕事とするという行為は、主婦自身のアイデンティティを維持するためとも考えられる。つまり、本人に意識されているかどうかは別にしても、家事の仕上がり具合にこだわるのが家の管理者という主婦の役割を果たすことになっている。

4-2-3：メイドに委託しづらい家事＝対人的かつ複雑な作業をとまなう家事：

料理，子どもの世話

◎料理

本研究の対象者28人のうち，料理をメイドに委託していないのは14人だった。ただし，そのうちには野菜を切るなどの下ごしらえ作業についてはメイドに委託しており，主婦の仕事となっているのは味付けなどの仕上げだけという人も含まれる。

メイドに料理を委託していないケース

【事例】

Kさんは，週3回の通いのメイドを雇っている。掃除や料理，洗濯，食器洗いについてはメイドに委託している。子どもと遊んでもらうこともある。また，料理については野菜を切ってもらい，ゆでてもらうまでは委託していることもある。しかし，料理の味付けについては自分でやると決めている。また，彼女のメイドは料理が苦手と公言している。

K「料理は自分でやろうというところはあったから、まあ、それ以外は、ちょっと環境変えるところは手伝ってもらってもいいかな？と思って、うん。周りの人で料理を全部お願いしている人とかもいて、ちょっと、それは私のあれには合わないなと思って、そこはちゃんと自分でやろうって決めたから、掃除とアイロンぐらいは全然、私の中では抵抗無かったかな」

筆者「料理を任せたくないという、何か理由とかあると思う？」

K「うーん、それまで任せちゃうと、本当に、私のやることも無くなっちゃうし、料理ぐらいね、自分で、まあ旦那に出してあげたいかなっていうのもあったし、自分で食べたいなっていうのもあったし。」

Kさんは，料理を主婦の役割（＝自分のやること）と結びつけている。一方で，掃除やアイロンは，環境が変わって不便な生活を補うためには委託してもよい家事とされている。西(2004)は，香港駐在員家庭の妻が育児と料理を妻のコアワークとして認識して家事を選択的に行い，掃除・洗濯・アイロンかけはメイドに委託しても主婦役割を果たせると報告している。Kさんのように，意図的に料理を任せていない場合には，西の分析結果があてはまると思われる。

ただし，一方で，料理を任せたくても，メイドが日本食を作ることができないために任せられないということもある。また，フィリピン人の作る料理は日本人にとっては，油が多く，野菜が少なく，味が濃いという評価が多い。料理は各家庭における差異もあるが，文化的な差異によって，フィリピン人のメイドには委託しづらい家事になっている。

【事例】

Oさんのメイドは，教えても料理ができるようにならなかった。

0「そうそう。最初はいろいろ教えたんですが、いつも焦がしちゃうし。焦がすから火を弱くさせたら、ものすごく弱くして30分ぐらいつけて、油っぽいものになってしまったとか。(中略)コロッケはこれぐらいの大きさにしてねと見本を作ってるにもかかわらず、こんなもの(大きさを示す手のしぐさ)ができたりとか。そういうふうだったので。野菜を切って洗って、ぐらいを頼んでも、(家族が)三人だということもあって、そんなに作る量も多くないし。油で炒めてとお願いしても、油はこれぐらいでいいと見せてるにもかかわらず、1カ月ぐらいするとまたどぼどぼ入れていたりとかして。体の健康にかかわることなので自分でやろうって。時々、カットしたり、炒めるところまでとか。最後の仕上げは自分でやるみたいな」

また、日本人駐在家庭の主婦はフィリピンの水道水を安全性の点から信用しておらず、基本的に飲料水を購入することが多い。そして、飲料水を料理にも使う。そのために、料理の作業に複雑さが増し、指示することに加え、メイドに生活状況の格差を感じさせることにもなりうる。

【事例】

Aさんは、飲料水を使って料理をするために、メイドに料理を委託していない。

A「料理は全く手伝ってもらってないです。やってもらいたくないというわけではないんですが、料理に関しては自分でやりたかったの。多分、お水のこととかもあって最初は抵抗があったんです。飲める水と飲めない水が二つあるじゃないですか。そういうのを使い分けてお料理とかをしてもらわないといけないというのもありましたし、野菜とかを洗ってもらうのにも、きれいなお水を使っていたきたかった。それを言うのは抵抗がありました。普段そういうものを使って生活している人たちだと思うので。(中略)そのあたりは気を遣ってしまいますね。やってもらうとなると、かなり細かく言わなくちゃいけないなというのがあって。一回やってしまえば問題ないとは思ったのですが、そこまでのことは自分でも時間が持てたので」

メイドに料理を委託しているケース

料理を完全にメイドに委託していたのは7人だった。その場合、朝食や夕食だけではなく、夫のお弁当を作ってもらうこともある。また、メイドに完全に委託しているわけではないが、ときどき料理を作ってもらう、または過去のメイドにはときどき作ってもらっていたという人は7人いた。

完全に料理を委託しているといっても、先に見たFさんのように、メイドに献立の作成までまかせられる場合もあれば、次にみるHさんのように、献立の決定は主婦の仕事とする場合もある。

【事例】

Hさんのメイドは料理が得意で、メイド本人も料理が好きだという。献立を決めて買い物をするところまではHさんが担当し、メイドには実際の料理の作業部分のみを委託している。それは、Hさんが食べたいものを決定するだけではなく、栄養バランスの面で、メイドに献立から委託することに多少の不安があるからだという。

H「人によるんだろうけど、わたしは自分でこれが食べたいって決めたい方なので。それがめんどくさいんだけど、全部おまかせで考えてくれたら楽なんだろうけど。買う物を一週間決めて、献立を決めて、じゃあ今日はこれを作ってって、一回一回お願いしちゃうんだよね。文句言わない人だったら、全部任せて勝手に作ってくれるんだろうけど、なんかね、こっちって野菜がちょっと少ないんだよね。おかずが少しでごはんが多い、みたいな感じなので。野菜をたくさん食べたいみたいな。青菜とか、鉄分とりたいなって思って。そういうのを食べたいから、バランスを考えて、指示して作ってもらってるかな」

このように、料理を単なる作業としてとらえる場合、食材や料理方法の決定というような、管理という仕事は残されるとしても、メイドに作業部分を委託することは、困難ではない。ただし、Hさんも、料理に、単なる作業という以上に、子どもの教育という価値を意味づけるとなると話はちがってくるという。

H「それはやってもらって、思うんだよね。お手伝いしてもらいたいし、料理を覚えてもらいたいとかを、上の子に思うのよね。だから、（メイドがいて）ありがたいんだけど、（母親が料理をするという）そういう場面を見せとかなないと子どもがやらないなって。それは日本に帰ってから困ると思っていて。だから、ときどき、わたしが料理しているところを見せて、一緒に料理も手伝わせるとか、そういうこともやらせとかないとなって。もう4歳だし。まだそんなに完璧にはできなくても、お皿運んでもらうとか」

このように、掃除やアイロンかけなどの標準化しやすい家事に比べて、料理は個別的で、文化的にも差異が大きい家事であるゆえに、日本人家庭にとってフィリピン人メイドに委託しづらく、また個別的であるがゆえに主婦の仕事として認識しやすいともいえる。

◎子どもの世話

子どもの世話は、他の家事に比べると、より対人的な家事といえる。子ども中心主義といわれるように、日本社会では、子育てへの関心は非常に高く、父親以上に、母親の重要な役割は子育てだと社会的にも個人的にも認識されやすい。

一方、フィリピンでは、ヤヤと呼ばれるベビーシッターを安価に雇うことができる。メイドのなかにはヤヤを苦手とする人もいるが、単にヤヤとして雇用されるだけでなく、ハウスヘルパー兼ヤヤといった形で、家事の合間に子どもの世話もできるメイドが多い。そのため、経済的に多少余裕があれば、子どもをメイドに預けるといったことは社会環境が整っているといえる。

本研究の対象者は、基本的に仕事をもたない専業主婦ということもあり、子どもの世話のすべてをメイドに委託しているというケースは見あたらなかった。ほとんどのケースでは、子どもの世話をメイドに委託するとしても一部であり、主婦が料理をしているあいだに子どもと遊んでもらったり、ときに主婦が子連れで外出できないときに、子どもを短時間みてもらうというケースが多かった。

【事例】

Rさんのメイドは、一通り家事が終わると、3歳と0歳の子どもたちをコンドミニウムの屋上

に連れて行ってくれるため、Rさんは子どものいない時間に休憩したり料理をしたりしている。

R「(現在住んでいるコンドミニウムの)屋上に家プールとあと芝生があるスペースが広場、広場っていうものでもないですけど、その行くところがあって。彼女がいつも朝と夕方子供達を連れて遊びに2時間位連れてもらってすごく助かるんですよね。最初はすごく心配だったんですけど。あのメイドさんが各コンドミの子供達を連れて上に連れて来てるので、よく聞いているとやっぱりけんかをしたり、気が合わなかったり。赤ちゃんとか歩きまわる子を連れてるので、赤ちゃん見ながらうっかり、プールがあるので落ちた時とか危ないなと思ってたりしたんですけど。まあ色んな人の目がいきとどいているのか、そういうトラブルも無く機嫌よく帰ってきているので、上の子が。だから問題は多分ないんだろうなと思って」

ただし、Rさんのように、信頼できるメイドを雇うことができた場合には子どもの世話を任せることもできるが、実際には子どもの世話を、責任をもってしているようにはみえないメイドを目撃することもある。また、メイドの子どもへの接し方が日本人主婦の期待以下である場合には、メイドに子どもの世話を委託することに躊躇が生じる。

【事例】

0さんは、子どもが起きている時間にメイドに預けてはいない。一方で、子どもは幼稚園に通っており、0さんによると、子どもをメイドに預けることと幼稚園に預けることには大きな差があるという。それは、ヤヤは専門の教育をうけているわけではないことと、実際に公園などで見かけるヤヤの働きぶりに対する低い評価からきている。

0「やはり、自分で違うなと思うのは、幼稚園に預けると、そこで子どもの世話をする人はそれなりの教育を受けた人だから、子どもの可能性を引き出すようなことをやってくれるんです。でも、ここで皆さんが言っているヤヤさんという人は、それなりの教育しか受けていないからそれなりのことしかできないので。(中略)食べ物に関しても、●●(R地区の公園)でよく見るのは、ヤヤさんたちがみんな集まってスナックをパーッと開けて。そうするとそれを見ている子どもたちはどうしてもからいポテトチップスとかを食べたくなるから、ヤヤと子どもと一緒にポテトチップスを食べてるんですね。多分ああいう状況を親は知らないんだろうなと。先生だったら絶対そういうことはないと思うんです。ポテトチップスをパーッと開けて食べるということもないし。どこかに移動しようという時、ヤヤだと「行くよ行くよ行くよ」と、大泣きしていても引っ張ってでも連れていったりするんです。でも学校の先生だと上手に話してうまく連れていく。やはりその辺が違うので、私はヤヤを使う代わりに1歳半から子どもを幼稚園に入れて、自分の時間を確保し、子どもの社交性も育てられたらいいなと」

さらに、メイド自身の経験不足だけでなく、メイドの体調不安からも預けられないこともある。

【事例】

Cさんは、料理を含めて家事全般をメイドに委託しているものの、子どもの世話についてはまったくメイドにしてもらっていない。それは、独身のメイドには子育ての経験がないこと、

そしてメイドの体調に個人的に不安を感じているからである。Cさんのメイドは高血圧もあるため、子どもを預けているときに何か起きると困るということもある。そのため、どうしても子連れでは外出できないときには、メイドではなく日本人の友人に子どもを預けている。

C「赤ちゃん関係のことは全部自分で。赤ちゃん関係でやってもらっているのは、おしめとか洗濯とかです。初めての子もだし、やはり心配なので子守とかはやってもらっていません。彼女は子育ての経験がないので、彼女自身そこまで……。今思えば、子育て経験のあるメイドさんのほうがよかったななんて思うこともあります」

筆者「お手伝いさんは全然だっこもしないですか」

C「そうですね、させていないです」

筆者「やりたいとも言わないのですか」

C「きっと、お願いしたら喜んでやってくれると彼女も言ってたんですが、病気とか何となく気になって。風邪とかも」

また、子どもにとっての教育という点から、特に子どもが自分でいろいろとできるようになる年齢になってくると、メイドが子どもの世話に関わりすぎるのが、子どもの自立の妨げになるという点で不安の声が聞かれた。

【事例】

Zさんは、「私と夫は立場的に、雇っているっていうっていう立場」だが、子どもには「自分のことは自分でするように」と言っている。子どもには、メイドにきちんと挨拶することやお礼をいうことなどを注意している。掃除についても、子どもの部屋に関しては片付けず、床を掃除するだけにしよう、メイドにお願いしている。

Z「部屋とかもちんちん放題ちんちんでも、きちんと掃除してくれるから。いまの人には、「ここは床だけ掃いて」って言って」

筆者「子どもの部屋に関しては」

Z「いまの人にはね、物を移動しないでっていつてるんだけど。なかなか、子どもにとっては良くない環境」

以上のように、メイドの能力の低さやメイドの体調のために、あるいは子どもの教育上の点で、子どもの世話をメイドに委託することに躊躇することもある。しかし、メイドが子どもの世話を責任もってできるとしても、メイドが過度に子どもへ感情移入することを恐れて、メイドに子どもの世話を委託したくないという人もいた。

【事例】

Mさんが以前、住み込みのメイドを雇っていた。Mさんによると、そのメイドはMさんの子どもたちへの思い入れが強く、自分が子どもたちの母親のようにふるまうようになったことに違和感を覚えたという。

M「常に一緒にいるというのが嫌だったのかな。私は、子供たちを子守に取られたくなかったんですね。子守というか、子育てを自分でしたかったので、子供との時間を取られるのがすごく嫌だったんです。だから、留守番で見ていてもらうのは、それは仕事として

やってもらえばいいことであって、預けるのが当たり前になってしまうのは嫌だったんですね。(中略)例えばちっちゃい子を保育園に預けたり、スクールに預けたりした場合、そこには何人もの先生がいて見てくれますよね。1人につき必ず1人専属というわけじゃないと思うんですけども。でも、子守というのは、全く他人なのに、その子を専属でずっと見ているわけですよね。だから、私は、それがあんまりよく感情的に理解できなくて。住み込みの方が来ても、子供好きだったので、余りにも感情移入をしているように見えたので、それはすごく嫌な思いをしたんですね」

また、メイドの方が子どもに感情移入するだけではなく、子どもの方がメイドになつて、母親がその事態に嫉妬を感じることもある。

【事例】

Gさんは、最初のメイドに子どもの世話を任せることがしばしばあったが、それによって一時期子どもは母親よりもメイドの方になつくようになったように感じ、その後雇ったメイドには、子どもの世話を任せるとしてもGさんの目の届く場面でしか任せていない。

G「私から●●(子どもの名前)の心が離れていったっていうのに気づいたっていうのが、まずあったのね。△△さん(メイドの名前)が、毎日のように公園にね、自分の仕事を終わらせて。公園に連れて行くと、●●は楽しみでしょうがないのよ。それで、真っ黒になって遊んでくれるから、ママがやってくれない遊びをしてくれるとか。自分の都合で動いてくれるわけじゃん。自分が遊びに行きたいと思ったら、ママはいうことをきいてくれないけど、△△さんだったらやってくれるっていつて。そういう信頼関係が二人の中で育っていたから、わたしはそれに気づかずに、わたしは家庭教師を雇って英語をやりたいとか、自分のやりたいことを優先にしていたのね。この国では自分のやりたいことができると思って。だけど、家事のように、人に任せて自分の時間がとれるっていうのと育児は別だっていうのに気づいたの。そのときに。それは、わたしが●●を怒ったときに、「△△さん!!」って言って●●が彼女のところにいったのよ。「△△さんじゃないでしょ!」って言って。「ママがいまお話しているんだから、ママのところにおいで」って言うても、「△△さーん!」って逃げていくの。いままではそんな経験、なかったから。じい、ばあにうまく逃げるっていうのと、ちょっとちがうじゃない。じい、ばあの甘やかし方と彼女とは、やっぱりちょっと違うと思っていて。国民性も違うし、しつけの価値観も違うから。この子の親である私が、彼に言いたいことを言えなくなっているということに、すごいとまどいがある。彼女も家のことだけの仕事をやっているよりは、ヤヤとして●●とちょっと遊んでいる方が気が紛れるから、毎日楽しく遊んでくれていて、お互いはいいいんだけど、わたしはすごい不快だったのね。日に日に不快感が募っていつて。この部分を私は本当に母親として、手放していいのかなっていうのを、気づかされたかな。それから、二人目、三人目、四人目の彼女も、一切させてない。たぶん、この先も…。二人目が生まれたときにどうかなっていうのはあるけれど、いまのところはないねえ。(中略)最初はお手伝いさんにすごく焼きもちをやいて、心が奪われてしまうんじゃないかと、●●が変わってしまうんじゃないかと。そういう不安があったのは、そのお手伝いさん自身が子守としての自信をもっている人だったから。「わたしに任せれば大丈夫」みたいな。「あなたは好きな時間がとれるし、●●はじゅうぶん楽しませてあげられるからわたしに任せなさい」ってい

う感じだったのね。そういう部分への疑いっていうか、あったしね。楽だけど、そこまで自分が楽しんで、●●の心が離れてしまってから、とりかえしがつくんだらうかっていうことを、最初の人で経験させてもらったから。だからわたしは、子守は雇わないって、そのあとは決めたし。子守的なことをお願いすることがあっても、基本は自分の見えている範囲内で、家の中だけって決めて、そういうふうに。あんなストレスはもう、受けたくないんだよね。」

これらの事例のように、たとえ社会に子どもを容易に預けられるシステムが存在するとしても、子どもへの影響をさまざまな観点から考慮する日本人の主婦にとっては、子どもの世話をメイドに委託するかどうかは掃除やアイロンかけのように簡単ではない。子どもの世話は、単に標準化しにくいというだけではなく、教育的な面もあるため、メイドの能力や質、過度な世話の排除が重要となる。さらに、子どもの世話自体が、感情表出をとめない、世話をする人と子どもとのあいだの結びつきを強化することから、母親と子どもの感情的結びつきを第一と考える場合には、メイドに子どもの世話を過度に委託することは問題視される。

4-2. メイド雇用の帰結

では、メイドを雇用し、家事を委託することによって、何がもたらされるのだろうか。本節では、その例として、家族の情緒性の強化とメイド雇用を前提として構築されるコミュニティをとりあげる。

4-2-1. 家族における情緒性の強化

メイドを雇うことにより、対象者は大なり小なり、家事負担が軽減されている。家事負担が軽減されるだけでなく、自分自身が使える時間をもてる。本研究の対象者には、自分の時間として、習い事やボランティア活動、勉強などをしており、ときにはマッサージや友達と食事、昼寝などの機会をもつようにすることで、自分自身のリフレッシュにつとめている人も多い。そのように、主婦自身が精神的に安定することこそが、家族の情緒性（情緒的安定）に貢献することになるという。

【事例】

Lさんは、フィリピンに赴任して最初の1年間はメイドがいなかった。その頃とメイドを2人雇っている現在を比較して、自分の家事負担が減ることによって精神的なゆとりが生じ、そのことが家族に大きな効用をもたらしていると語る。

L「（家事の）負担が減ることで自分のストレスが減るので、子供にも余裕を持ってやさしく接することができると思うし、夫婦仲もキープできると思います。例えば、昼間大変だと、帰ってきた旦那にもやさしい顔はできなかつたりとか、多分、旦那にもいろいろ小言を言いたくなると思うんだけど。（中略）やっぱり、来て1年間、メイドがいなかった時って、結構、うちは陰悪だったんですね。多分、旦那も、そうやって、帰ってきてもいい顔していない私にも嫌だったと思うし、そのいい顔を見ない私も気分が悪くなるし、みたいな、本当に悪循環にはなっていたと思うんですけど。子供も、今3人いるよりも、（メイドがいなくて）1人を育てていた時の方が、すごく育児に対しても苛々し

ていたと思う。2人っきりだと、もう本当にほかに行き場がなくて、でも、そこにもう1人だれかがいることで、子供も気がそれて、わがまま言っていたのに、メイドが通り掛かったことで、ふっとそっちに気がそれて機嫌が直ったりとかはあると思うんですよ。私も、最近の虐待の話だけど、2人っきりでいると、何かそれもわからなくもない。でも、他人がいることで、叱るにも、ちょっと自分も冷静さが保てるというのもありますね。（中略）でも、多分今、自分が家事をやってもらって余裕がある分、子供のやっただけでも寛容になれるし、かえって、ちょっと連れて行って向こうで遊んでくれたりして、1人で何か考えられる時間があるだけでも、すごいストレスが減る。2人っきりだと、ずっと常にこっちを気にしながらやらなきゃいけないでしょう？（中略）私がよく言いたいのは、何か、メイドがいると主婦だけが楽しめているように思われるのがすごく不本意。だから、「パパがゴルフに行けるのも、メイドがいるからなんだからね」みたいな感じで、よく言ったりします。あと、メイドさんがいるから子供も我慢なくていい部分が結構あると思うんです。うちなんて、下に2人ちっちゃいのがいると、上の子が「遊びに行きたい」って言っても、ちょっと送り迎えできない。ここは絶対送り迎えが必要だから、できないとかってなるけど、そこはメイドさんをお願いして、「じゃ、私が送り迎えしてあげる」とかもできるし、出産直後なんかは、やっぱりまだ新生児だと外には出せないから、上の子もずっと家で過ごさなきゃいけないところを、ちょっとメイドさんのところに行ってもらったりとかもしていたし」

【事例】

Qさんもメイドの存在は、夫婦で家事分担について争わなくてすむおかげで、夫婦仲の維持に影響していると語る。

Q「育児に専念できるしね。夫婦関係もそれで、けんかとかも少なくなってると思う。旦那が育児に協力できない分、メイドがいなかったら、すごいわたしにストレスがかかって、絶対けんかとかも増えるじゃん。夫婦が仲良くいられるのも、メイドのおかげかなと思うし」

【事例】

Gさん、Tさん、Uさんは、メイドに家事を委託することで、自分に生まれるゆとりこそが、子育てに重要だと語る。

G「やっぱり、無理をしないのが大事というか。心の健康が大事であって、身体もそうだけどね。心が病んで疲れてしまうと、身体にも影響がでるし、それがもう、もろに子どもには伝わるから。おかあさんがやっぱり太陽であるっていうのは、わたしのポリシーで。わたしの太陽の場合は暑苦しいんだけど。でもおかあさんがいつもにこにこしていることが、すべての根源っていうか。そのために何が必要かって。そのために人を使ったり、おいしいものを食べたり。わたし中心でまわっているようだけど、結局おだやかなおかあさん、笑顔のおかあさんに育てられたっていう影響は大きいからね」

T「子どもの面倒を見てもらえるので、子どもに対していらいらしないっていうか。子どもに対して、どうしてもいらいらというか。ずっと一緒にいると、どうにもならない、キ

一ってなって、あっちもキーってなって、ってというのがたぶんないんじゃないかな。日本にいるお友達の話の聞いてると。あとはしなくてもいい、家事をやってもらってね。日本ではしなくちゃいけない家事をね、やってもらえて。やっぱり自分の時間ができるのが一番のメリットかな。総合的に言うと」

- U「やっぱり同じように自分の好きなことができるっていうのがあって。日本だったら、子どもを置いて自分の習い事に行くっていうのはありえないことだと思うんですけど、それができているので、そこでいろいろ発散できて、子育てとかも、たぶん日本だったら煮詰まる物があるかもしれないけど、発散の場が設けられるというか」

山田昌弘は、「家族責任を負担すること＝愛情表現」（山田 1994: 65）というイデオロギーが近代家族を維持するための重要な装置であり、日本ではその家族責任を、「男性—資金調達、女性—家事と感情ワークという分業」（山田 1994: 69）という形で根強く指示されていると指摘した。しかし、メイドを雇う日本人主婦においては、愛情表現としての家事という意味づけは弱まっており、自分の感情を状況に合わせてマネージするような感情労働によって家族に情緒的満足を提供するという形の家族責任に大きくシフトしている。つまり、家事の作業部分をメイドに委託することができる状況では、主婦に精神的なゆとりが生じることが主婦本人だけではなく家族にとっても重要なことであるとされ、主婦は他の家族成員に対して、状況に応じて自分の感情を抑圧したり、状況に必要な感情を表出したりすることによって、つまり感情労働（Hochschild 1983）に集中して取り組むことで主婦としての役割を果たしているとみなす。そして、メイドの雇用は、情緒的存在としての主婦の役割の強化をもたらすことで、結果的に家族の情緒性の安定化に効用を生むと価値づけられている。

このように、メイドの雇用は、主婦にとっては単に作業としての家事の負担が軽減されるというだけではなく、主婦に精神的なゆとりが生じ、それによって感情のマネジメント作業が容易になり、家族の情緒性を安定化されることに貢献できるというところにつながっている。

4-2-2. メイド雇用を前提としたコミュニティの構築

マカティ市の駐在日本人社会では、メイドの雇用は一般的な現象となっている。そのために、日本人コミュニティはメイドの雇用がデフォルトとされていると思われる場面に出くわすことが多い。日本人小学校の参観や保護者会には、未就学児をメイドに預けて、親だけで参加するのが一般的だという。また、夫の会社の妻だけで集まる機会（ミセス会）も会社によっては子どもをメイドに預けてくるのが暗黙の了解となっている。

【事例】

Vさんには小学生の子どもがいるが、小学校関係の用事には、下の子（未就学児）を連れていくのがはばかれるような雰囲気があるという。

- V「ここは上の子がいるとすごく出かけなきゃいけない用事も多くて、ちょっと雇わないと無理。連れてくるっていうのはあんまりないんですよ。わたしは子どもがMJS、日本人小学校に入ってるんですけど、あんまり連れてこないんですよ。下の子を。連れてくると、「何連れてきてんの？預けてくれば？」みたいな感じなんで。」

また、インフォーマルな集まりであっても、メイドに子どもを預けて参加することが基本となっている場合もある。

【事例】

Mさんによると、マカティ市の日本人コミュニティでは、インフォーマルな食事であっても子どもをメイドに預ける必要が生じることがあるという。

M「例えば、ママだけでランチに行くとかいうのが、日本ではちょっと考えられないですね。もともとこっちに居る人は、メイドさんがもういるので、子供さんを預けて外に行けるというのがあるので、そこに私も入りたければ、同じようにやっぱりお手伝いさんを置いて、行くようになるというのがあったかな。」

さらに、小さな子どもをつれていると、メイドを伴わずに歩いていること自体、不思議がられることもある。

【事例】

Wさんの住むR地区は高級コンドミニアムが立ち並び、小さい子どもがいる家庭ではヤヤが雇われていることが多い。そのため、Wさんがメイドを連れずに歩いていると、声をかけられるという。

W「いっつもさ、R地区のショッピングセンターとか歩いていてもさ、金持ちが多いからあれなんだけれどもさ、ヤヤが多いわけよ、やっぱり。そして、「ヤヤがいないのか?」とか言われるからさ、歩いてて」

筆者「ああ、本当に?」

W「うん。私が抱っこして、買い物をしてって」

筆者「ああ、ヤヤはいないのか?って、何で抱っこして、ママが抱っこしてるんだって?」

W「そうそうそう。日本人なんて、それでさ、ベビーカーでさ、買い物に行って、大荷物持ってって、普通じゃん」

このように、メイドを雇うことが、特に外国人である日本人にとってはマカティ市では一般的なこととされており、そのために、メイドを雇っていることが前提で催しへの参加がうながされたり、メイドを連れずに歩いていることが奇妙に思われたりすることさえある。また、催しに参加するだけでなく、友人を家に招待したり、ホームパーティーを開いたりする機会も日本に比べると多く、その際には、メイドのヘルプが必要とされている。

メイドの雇用が前提としてコミュニティが構築されている場合には、もはや日本人主婦本人が家事負担の軽減のためにメイドの雇用を望むか望まないかという次元の話ではない。メイドを雇用しないという選択がときには困難となることもありうる。

4-3. 私的領域に他者が存在する生活

メイドを雇うということは、いままで家族のみ生活領域であった家の中に、家族以外の他者が恒常的に存在することを意味する。とくに、本研究の対象者の場合、夫の海外駐在に同

行する形でフィリピンに赴任しており、言葉や生活習慣も異なる現地の人間を雇っている。日本ではメイドを雇うことは一般的ではないため、駐在生活においてもメイドを雇うという経験は、対象者にとって非常に新鮮なものである。それは、家事を代行してもらうというだけでなく、私的領域に家族以外の他者が恒常的に存在するという経験でもある。本節では、そのように、家族の生活空間に他者が存在することを、対象者がどのように経験しているのかを記述する。

4-3-1. 家事の主導権をめぐる緊張

メイドを雇って、家事を委託することにより、主婦の家事作業量は確実に減少する。しかし、その一方で、家族の生活領域で、文化も言葉も異なる他者が存在し、長時間同じ空間を共有しているという状況は、対象者に不安感・緊張感をもたらしている。

【事例】

Vさんは、駐在生活2年、現在は、料理・洗濯・掃除を担当するメイドと、子どもの世話をするメイド（ヤヤ）を雇っている。いまはずいぶんメイドに生活にも慣れたというが、最初はメイドのいる生活、メイドへの指示に戸惑いがあったという。

V「最初の頃のことはねー、やっぱりなんていったらいいんだろう。気を遣うよね。いまはあんまりもう遣わないんですけど。人がいるので…なんかね、うちの主人に言わせてみれば、楽させてやってるんじゃないかくらいの感じなんですけど、こっちにしてみれば、雇わなくていいとはいわないんだけど、やっぱり、いるはいるなりにストレスがかかるんですよね。英語でコミュニケーションとらないといけないし。いまは、しばしば言うけど…ここまで言っているのかしら、とか。この料理の味付けが濃いわ、とか。ここの掃除もうちょっとね、とか。最初はがまんしてたから」

Vさんの発言にもあるように、メイドを雇い始めたばかりのころは、多くの日本人がメイドにどう指示をしていいのかわからないこともあり、次のようなことも起きる場合がある。

【事例】

Dさんの友人は赴任当初、メイドとどのような関係を築けばいいのかわからず、メイドが家の中のことを決めるというような状態だったという。

D「A地区に住んでいた人が言っていたのは、ご主人が先にA地区に仕事で来て、あとから奥様が来たときにもうすでにメイドさんがいたわけです。メイドさんが主導権を握っていて、その奥さんは初めて日本から来て、メイドさんとどうしたらいいかわからないから、メイドさんの言われるがままにしていたんですって。そしたら「ママ、私のランチを作らないの？私のランチがない？」と平気で言っていて、でも最初は普通だと思って、（メイドに）ランチを作って上げていたんだって。その人もあのときは、皆から段々情報が入って、「それおかしい、おかしい」になって解雇したけれども。最初は本当に主導権を握られて、言われるがままに全部をしていたって」

日本で主婦が家事を行う場合、家事の方法についての決定権（料理の味付け、掃除の手順

等)は、実際にその作業を行う主婦が持っている。フィリピンでメイドを雇う日本人女性の主婦アイデンティティは、このような家事の管理責任者としての権力に支えられている面が強い。しかし、実際に主婦がメイドに家事を委託しながら自分の主婦アイデンティティを保持するという問題は、どこまでメイドが家事の内容・方法を決定する権力をもつのかという問題と相容れないために、主婦とメイドのあいだではその線引きをめぐって小さな衝突が繰り返されられる。

【事例】

Xさんは、住み込みのメイドを雇っている。Xさんによるとよく仕事ができ、性格も明るくて良い人だが、「主導権を握られてるように思うときが何回か」とあるという。

X「ワックス塗ってもらおうと思って、前は液体のを買ってきたんだけど、今回はペースト状のを買ってきたら、それを彼女が見て「ママ、これは使えません」って言って渡されたの。テレビを子どもたちと見てたらね。「でもこれ、WOODって書いてあるから使えるんじゃないの？」って言ったときには、もう消えてたの。「え？」って思って。「その渡されたワックスをメイドさん部屋まで返しにいきなさいいけないの？」って。「渡されちゃったけど？」って思って。(中略)結局、次の日くらいに、「わたしは怒ってるんだけど、わかる？わたしは話したいことがあるんだけど」って言ってね。「そういうことをためてちゃいけない、わたしも」って。「ワックス使えませんよ」って、彼女は気も強くて、よくいろいろなことを知っているからいうんですよね。だから、わたしもね、「あなたはフィリピン人だし、この国のこともよく知ってるし、いろんな商品のことも、メイドとしてやってるから知ってるかもしれないけれど、わたしもいろんなワックスだったり、いろんな洗剤だったり試してみたいのよ。それについて、あなたがこれは使えませんとか、これは良くないとか、言わないでほしいの。やってみてよ、とりあえず。その上で、私が判断して、これってちょっとにおいがきついね、とかいうから。あなたが知識があるのはわかるけど、仕事においては一応、「イエス、ママ」って言ってほしいの」って。(中略)「一応、天気の話とかニュースの話とか、子どもの話とかするんだったらね、話してもいいんだけど、一応このワックス使ってとか、この洋服はこういうふうにここにしまっとか、そういう仕事の話のときには、自分の意見は必要ない、わたしがそうして欲しいと思ってるから、正しいとか悪いの判断はいらないから、イエスママ、って言ってほしいの。これはビジネスの話だからね」って。そういうので、なんていうのか、普段は積極的に自分の意見とかを言うから、気が強いというか。わたしが話があるって言ったときも、「もうわかってます。でも、わたしに話はないです」とか言うの。いやいや、あなたに話がなくても、ママはわたしだからって。ちょっと間違わないでね。「話はないです、私に話はないです」って。「あなたになくても、わたしにあるの」って。そういう感じ。もともと気が強くて。なんでもハイハイっていうタイプではなくて、自分で判断しようとしちゃったりもする。そういうところが、彼女は気が強いな〜って」

【事例】

Pさんは、メイドを仕事がよくできると高く評価している。一方で、Pさんの指示を待たずに自分で判断して家事を行うことも多く、それがPさんにとってはときにフラストレーションをまねいている。

P「壁に強力なボンドでフックみたいなのを勝手に貼られそうになったの。それはもう永遠にはがれないからやめてって！うちね、とにかくやる前に聞いてくれっていうんだけど、自己判断が多いの。もうもどらないものはやめてほしいの。（布製のカバンに名前を書くのに）油性マジック使うとか」

P「私はまず聞いてほしいのだけれども。あまり聞いてくれないでやっってしまうんだよね。だから多分気を遣って。私が台所で料理してまな板と包丁を出しておくでしょう。私はあとでやろうと思っているから出しているのだけれども、その間に〇〇（子どもの名前）に呼ばれたりして、ちょっと外に出ると、もうそれが洗ってしまわれていたりとか。また（まな板と包丁を）出して。それを1日3回、4回繰り返すことになって」

日本人主婦は、メイドに作業としての家事をどれだけ、どのように委託するのかを決定するだけではなく、メイドとどこまで決定権を共有するのかという問題に直面する。家事の内容の決定をめぐる、ときには雇用主である対象者はメイドとのあいだに緊張関係を生じさせることにもなる。

4－3－2．私的領域における他者の視線

家事の決定をめぐる主導権争いによる緊張だけではなく、家族成員ではないメイドが私的領域に存在することで、その視線が監視のように感じられ、生活に緊張をもたらすという側面もある。

対象者は基本的に、メイドの手前、主寝室以外では服を着替えず、居間などメイドが通る場所では身だしなみや行動に気をつけている。

【事例】

Rさんは、メイドさんがいる手前、気を遣ってリラックスできないという。

R「わたしのちょっとみえというか、みえっていうのでもないんですけど、例えば夜中子供がずっと寝なくて朝しんどい時でも、とりあえず着替えはしなきゃとか、パジャマのまんまいたらなんかちょっと、っていうのがあったりとか。ちょっとリビングに横にしていることをして、彼女が通るの気を使うだろうなって、こっちが勝手に考えてしまったりとか。リラックスしてないわけでもないんですけど、何かどっかにメイドさんがいるっていうのが頭にあって、ゆっくり出来ないっていうのはありますね」

そのため、メイドがいない日にほっとするというようなこともある。

【事例】

LさんやZさんは、メイドが家にいない時間になると精神的に安堵できたという。

L「本当にはじめは、「お給料払うからこの日は来ないで」と言うぐらい。何か、いられると嫌だから、「払うけど、用事ないけど来ないで」って言っていましたね」

Z「いてくれないと困るんだけども、日曜日いないでしょ。いないとほっとするの」

メイドの視線をただ感じるためにストレスとなるわけではない。メイドは家族成員ではないために、つねに家族の外とつながる存在であり、メイドからプライベートに関する情報が流出することが危惧されるためである。実際に、対象者からはメイドから前雇用主の生活事情を耳にしたり、公園のメイドから雇用主についての情報を耳にしたりする機会は多く、それゆえ自分のメイドも自分のプライバシーに関する情報を漏洩させるのではないかという不安をもつ人は多い。

【事例】

Eさんは、現在のメイドがEさんが帰任したあとに、自分たちの生活について次の雇用主に話すだろうと思うと、気が抜けないという。それは、現在のメイドが過去の雇用主の生活について、Eさんに話すからである。

E「けっこう、前に仕えていたうちのこともいろいろ言うもんだから、いいのか悪いのかわたしにはわからないけれど。（中略）次にもし行っても、前はこうだったとか、何を基準にするのかわからないけれど。あとはいろんなトラブルとか次に言うだろうから。長くても2、3年で、早い人だと数ヶ月で交替しますよね、合わなかったりすると。変わったときに、自分のうちのことを何って言われてるかと思うと、気も抜けないところもありますよね。なんとなく。いいところだけ見てくれればいいけれど、私なんかしょっちゅう寝てばかりで、何もしないし、いつも文句ばかり言ってるから」

【事例】

Gさんは、公園にいるメイドを観察して、他の家のメイドが雇用主のプライベートな情報を見知らぬ他人に平然と伝える様子を見て、心配になったという。

G「「見て、かわいいでしょ、この子オーストラリア人なのよ」とか。そういうステータスとかも、彼女たちの中にあると思うんだ。（メイドが子どもを公園に連れて行って）そういう見せ物にされたくないっていうか、私なんかはね。だって、そのときに平気で家の情報を話すからさ。だいたい、連れて行くと、「あなた何人？」って最初に聞かれて。「なんで？」って聞くと、お手伝いさんが、「この子はコリアンとなんとかのハーフなのよ」とか言って。聞いてもいないのに、言うわけよ。そんなことを言う必要ないでしょ、変な話。そう思ったら、自分の子どももね。「この子はジャパニーズで、パパはどこどこに勤めていて」とか平気でいうわけ」

【事例】

さらに、メイドは、同じコンドミニアムのメイドだけではなく、ほかのメイド仲間と携帯メールを通してネットワークをもっているために、メイドの噂になりそうな種をまかないように、行動を気をつけなければならない。

T「なんか、だら一ってできない。ほら、なんか、日本語だから何しゃべってるかわからないとは思っただけだけど、なんていうんだろう、夫婦の会話も、けんかとかしてても聞かれてるんじゃないかとか。そういうところがいやだ」

U「それがメイドさん同士の噂で広まっちゃったり。またそこからママに伝わって、あの家はどうかと言われるかもしれないし」
T「下手なことはできないよね。ラブラブだったらいいのかもしれないけど」
U「いい噂だったらいいんだけど」
T「あることないこと言われたらいやだね」
AA「でもぜったい言ってるよね」
T「うん、ぜったい言ってると思うけど」
U「尾ひれがついてるよね」

このように、メイドが家の中の出来事について、漏洩する可能性があるという意識があることにより、実際には恥じるような状況ではなくても、メイドがどのように解釈するかということが重要となるため、次の事例のようなことも起きる。

【事例】

Iさんがドキュメンタリーを見ていたところを、買い物帰りのメイドに目撃された。メイドの態度から、Iさんの行動を誤解したのではないかとIさんは心配になったという。

I「こないだ彼女に買い物を頼んで、彼女が帰ってきたときに、わたしはNHKをつけてテレビを見てたんですよ。テレビで、ボクサーが癌に打ち勝ってトレーニングをするみたいな。（ボクサーが）「ウエ、ウエ」みたいな、音だけ聞いていたら、エロビデオみたいな声だったんですよ。男の人が、「ウエ、ウエ」って上半身裸でテレビに出てて。上むいて。それを彼女（メイド）が帰ってきて。まさにそのときで。ドキュメントものだったから、エロっぽくないし、あれなんだけど、彼女は、「ああ、ママ！！」って。目をそらしたんですよ。でもわたしはニュアンスが伝えられなくて。でも、もういいやと思ったけど。きっと彼女はわたしが買い物に行っているあいだにエロビデオを見ているに違いないと思ったら、もうすごく切なくて。英語しゃべればよかったって。（中略）あの上半身と、「ウエン、ウエン」という声は、あれはもう、ぜったい。目をそらした、●●さん（メイドの名前）の顔が忘れられない。買い物から帰ってきて、「これ…、ママ…！！（息を呑む）」っていうのが」

メイドは雇用主の私的領域で働き、雇用主の生活を見聞きしている。そのため、雇用主にすれば、私的領域においてもメイドの視線を感じ、メイドが外部に情報を漏らす可能性を前提に、自らの行動に制限をかける必要が生じるのである。

4-3-3. メイドとのトラブル

メイドを雇用する生活は、家事委託によって家事負担の軽減がなされる一方で、家族成員以外の他者が存在することによる一定の緊張が私的領域にもたらされることはすでに述べた。本節では、メイドの雇用が家事の決定権をめぐる主導権争いによる緊張やメイドの視線を外部者による監視のように感じる緊張にとどまらず、メイドが実際的にもたらすトラブルについてとりあげる。

◎窃盗

メイドによるトラブルのうち、耳にすることが多い言説は、メイドによる窃盗である。対象者28人のうち、全員が、周りの人からメイドに何かを盗まれた友人の話を具体的に聞いたことがあり、実際にメイドに金銭や貴重品を盗まれた経験がある人は少なくとも5人いた。

【事例】

Yさんが日本に一時帰国からフィリピンに戻ると、メイドが仕事に戻ってこなかった。そのとき、わざわざ下着のはいた引き出しに置いておいた18金のペンダントトップと14金の指輪、パールのイヤリングとネックレスがなくなっていることに気づいたという。

Y「私と子どもが先に（日本に）帰ってたんですよね、2週間くらい。そのあいだ、主人は一人だったので、彼女ひとりで。主人が日本に帰るときには、彼女を前日に返したんですけれど。たぶん、その主人だけのときに、最後の日に盗ったんだと思うんですけれど」

ほかにも、ふつうならメイドが手を触れるはずがない引き出しの奥底に置いていた金庫の鍵を使って金庫から金銭がなくなっていたという話や、机の奥に置いておいた札束の枚数が減っている話など、実際にメイドが盗んだところを確認してはいないものの、金銭や貴重品がなくなっているという事例があった。これらの事例は、普通に掃除をしているだけであればメイドが見るはずがないところまで、メイドがのぞいているということを意味する。

【事例】

Kさんの夫の前任者が雇っていたメイドは2年間何もトラブルなく働いていたのちに、帰任直前になってメイドに金銭をとられそうになったという出来事があった。

K「何かのときのために、常に、何かあったときに帰れるように、それなりの現金が家に置いてあったらしいんだけど。（メイドは）2年間ちゃんと働いてくれて、信用もしてて。（帰任する直前の）最後の最後に、奥さんが外出先から帰ってきたら、そのお金ぐるぐるに、いろいろ包んで、最後、持っていかれる寸前だったって話は聞いたかな。そこまですべて言っても旦那さんは（メイドにお金を盗まれそうになったということ）を信じられないぐらい信用してた人」

また、携帯電話を勝手に使われた人もいた。

【事例】

Hさんは、夜に居間に置きっぱなしにしていた携帯をメイドが勝手に使っていたことがわかり、信用できなくなってメイドを解雇した。

H「わたしは子どもが寝るときに寝室に携帯を持って行かなくて。子どもが起きちゃうからさ。お財布は持って行くんだけど、携帯は置いてたのよね。それで、（メイドは）いつも朝にお掃除するんだよ。わたしが9時くらいに寝ちゃうとこの部屋に来て、携帯をいじって電話したりメールしたりとかして、使ってたみたいなの。履歴だけ消して。だから全然気づかなかったんだけど。たまたま、最後に打った履歴が、タガログで残ってた

のよね。わたしは絶対タガログなんて使わないし。入って来たメールじゃなくて、送ったメールだったから、これは絶対彼女だと思って。そんなことしてたってことは、お財布からお金もとってたかもしれないじゃん。勝手に使ってるんだと思って、もう信用できないからやめてもらったんだけどさ」

このように、窃盗や携帯の無断使用のほか、自宅電話の無断使用も日本人のあいだで情報として共有されるトラブルである。

【事例】

Zさんの最初のメイドは、メイドの友人にZさんの自宅電話番号を教えていたらしく、メイドの友人から毎日のように電話がかかってきた。

Z「一番最初の人ね、電話がかかってくるんです。彼女あての電話が。それで、とりついたら、毎日のかかってきて。とりついでいる自分が、どっちがあれなんだろうって。電話に関しても、彼女が勝手にうちの電話が使うなら、それはだめよって言えるけれども、かかってくるのをだめっていうのが、なかなか言えなくて。毎日毎日とりついでいたのが、すごいきやでしたね。」

金銭や貴重品、電話の使用に限らず、コーヒーやクッキー、ヨーグルトや果物などの食べ物の数がいつのまにか足りなくなっているという話も聞いた。また、米や洗剤といった、盗んでもすぐにわかりにくいものはよく盗られるという言説は日本人のあいだで共有されているようである。

【事例】

日本人のあいだで、食べ物を盗まれるという言説が共有されていることを示す事例。

T「ぶどうを食べられたとかね」

Y「●●さん（友人と思われる日本人の名前）ね。あったあった、通いのお手伝いさんね」

T「●●さん、最後、量ったって言ってたもんね」

Y「『Don't Eat!』って書いたって」

T「そうそうそう、すごいいやな顔されたって言ってたよね」

AA「書いたんだ」

T「そうそう、最後はふたに貼ったって言ってたよ。量って、やっぱり減ってるって思ったから、貼ったっていったもん」

以上のような、メイドによる窃盗という言説は駐在日本人のあいだで広く共有されている。メイドと駐在日本人のあいだに圧倒的な経済格差が存在するとしても、雇用主である日本人にとって、メイドの雇用はあくまで労働契約の関係であり、支払った労働の対価はあくまで給料として支払っているという認識がある。メイドの側にしてみれば、雇用主の生活を間近に観察していて、これくらいいただいてもいいかといった軽い出来心なのかもしれないが、雇用主である日本人はたとえ小さなものであってもメイドによる窃盗・無断使用については非常に警戒しているのである。そのため、高額であった場合にはもちろんだが、どんなものを盗まれたとしてもメイドによる窃盗・無断使用という言説は他の日本人の注意を喚起する

ためにあっというまに広がっていく。

◎メイドの勤務態度

また、メイドが無断で欠勤する、無断で遅刻する、突然辞めるということもよくあるトラブルとして日本人にあいだで共有されている。

【事例】

Dさんの最初のメイドは、無断で来ない日がつづき、辞めてもらった。

D「最初は良かったけれども、辞めるときにちょっとトラブルがあって、急に休むと言い出して。休むのは、「調子が悪いから」と言っていたから、「いいよ」と言っていたのだけれども、それでまたちょっと来て。「年明けにまた今度は来る」と年末に帰ったきり、もう来なくなって。連絡をしても何にも音沙汰がなくて。今度は忘れた頃にまた連絡があって。でも「こちらはもういいから、新しい人を見つけたからもういいよ」と言って断ったのですが。日本人の感覚ではあまりできないことをするというか、急に休むのもそんなに悪いとは思わないだろうし、また急に現れたり、あまり気にしないのかなというの」

【事例】

Bさんの最初の住み込みのメイドは、雇用上のルールを守らなくなったために注意したところ、週末に家に帰るようにはふるまいながら、そのまま辞めてしまった。その経験から、Bさんはメイドが休日で家に帰ったあと、メイド部屋に荷物が残っているかどうかを確認するようになったという。

B「最初に勤めていた女の子がやめちゃったときは、さっとやめてしまっって、物もなかったの。「帰ります」って言って、あとで部屋を見たらまったく何もなかったのね。そういうことがあったから、土曜日はとりあえず部屋をチェックするかな」

筆者「え？それはBさんの物がなかったんですか？」

B「彼女のものがすべてなかったの。日曜日に「やめます」ってテキストが来て」
(中略)

B「それは、注意をしたんだよね。決まり事がなあなあになって。ちゃんと守ってねって主人から言ってもらって。泣き泣きで。でも借金があったから、「その借金だけは返してから辞めます」って言ってたんだけど。その週末に、さよならって。借金も返せません、すいません、鍵はポストに入れておきました。って」

◎解雇時のトラブル

また、何らかの理由があってメイドを解雇する場合には、トラブルが起きやすいということとはよく言われている。そのため、日本人のあいだでは、たとえメイドの側に不備があったとしても解雇を申し渡したら、多めの退職金を払い、そのかわりその日のうちに出て行ってもらおうということが一般的である。対象者から聞かれた、解雇時のトラブルとしてよく聞く言説は、洗濯機のホースにタオルを詰められる、物を破壊される、物を盗まれる、というも

のである。

【事例】

Mさんは過去に3人解雇したが、3人ともその日のうちに辞めてもらうことはなかった。しかし、日本人の友人はそれを非常に心配したという。

M「いろんな人から聞いたんですけれども、結局、子供がいるし、もし、意地の悪い人だと、（解雇すると）いたずらされたり、物を盗まれたりするのです。私が一番最初に解雇した時には、友達が心配して、次の日、テキストくれたんですね。「昨日の晩は大丈夫だった？」って。「何もなかった？」って。「明日帰りたい」って言われたから私が一晩泊めてあげたら、その人はびっくりして。だから、人によっては、寝ている間に何かいたずらしたり、物を盗んだりすることもあるっていう話は何人かの人から聞いたことがありますけれども、私は、そういうのを彼女たちに感じなかったのて信じてしまって、次の日に出て行きましたね。最後の日は、みんなにこやかに一日仕事をして、最後に笑って「バイバイ」というふうに帰って行きましたね」

しかし、解雇の後に何らかの形で脅しをかけられたという話も2人の対象者から聞かれた。

【事例】

Xさんは、最初のメイドは態度が横柄だと感じたため、試用期間で終了し、本契約しなかった。そのときは、本人も納得したかのように見えたが、後日、脅迫まがいのメールが送られてきたという。

X「それから1年半、1年か1年半後くらいに、旦那の携帯にテキストがそのメイドさんから入って来て、わたしは何も悪いことをしていないのに、勝手に首にさせられた、みたいな」筆者「1年半後にですか？」

X「そう。それで、「このままフィリピンに居続けると悪いことが起きるわよ」って。「何かするわよ」的な。そういうテキストが（夫に）2回くらい来たらしくて」

また、解雇はメイドにとっては失業を意味するため、円満にすまないことも多い。メイドが雇用主の前で感情を爆発させ、雇用主にとっても精神的に大きな衝撃を受けることもある。

【事例】

Wさんは、メイドの勤務態度やメイドの子どもへの接し方に問題を感じたため、契約を終了することにした。その日のうちに出て行ってもらうなら、住み込みのメイドが困るだろうと思い、法律通り5日前に通告し、さらに退職金や支払わなくてもよいボーナス分など多めの金額を支払うと伝えた。しかし、メイドが仕事を失うことに対して発狂し、大泣きしてWさんにくっかかり、結局通告した翌日には荷物をまとめて出て行った。それでも、退職金やボーナスはもちろん、メイドが働かなかった日についての給料まで支払うことになったという。そのため、Wさんは「すごい人間不信っていうか、メイド不信」に陥り、「くやし泣きで寝れなかった」くらいに、精神的なショックを受けたという。

W「すごいトラウマになりそうです、今回のことが。(5日前の通告は)良かれと思ってしたことがさ。結構、言葉の違いもあるんだと思う、うまく解釈されなかった。(中略)彼女にしてみれば辞めさせられるということには変わりがないわけだから、やっぱ、それを、こっちは良かれと思って、ここまでのお給料を払うからねっていうふうに言ったとしても、上手く伝わらなかった、そこが。だから、私が金曜日まで働いて欲しかったけど、もうこんなところでやってられるかっていうふうに逆上され、(翌日の)夜9時過ぎているのに出て行くみたいな」

◎その他のトラブル

ほかにも、雇用主のいないあいだにメイドがメイドの友人や親戚を家に上げる、メイドが勝手に電化製品等を使って変圧器を通さないために壊される、という話もしばしば聞かれた。

これらのメイドにまつわるトラブルは、多くの日本人のあいだで情報として共有される。また、信用できるメイドだったのに突然トラブルを起こした、という表現もよく聞かれた。日本人のあいだで取り交わされるメイド・トラブル言説は、たとえ自分のメイドが現在まで信用できトラブルがなかったとしても、メイドに他者性を意識させる契機となり、メイドとの(とくに信用という点での)関係性の構築に影響する。

5. おわりに

本研究では、マカティ市の駐在日本人主婦28人へのインタビュー調査から、近代家族形成を経験し、メイドの雇用を日本では経験しなかった日本人主婦が、フィリピン駐在をきっかけにメイドを雇用するとどのような経験をするのかをミクロ的な文脈において概観した。その結果、本研究では主に次のようなことが明らかになった。

- 1)メイドによって代替できない家事はない。しかし、アイロンかけ、掃除、食器荒いなどのように標準化されやすい家事に比べ、料理と子どもの世話は、ヘルパーの経験と能力、雇用主の個別のニーズによって、メイドに委託が困難と感じられやすい。
- 2)近代家族にみられた、主婦が家事負担をすることによって愛情表現をおこなうというイデオロギーは、メイドの存在によって弱くなる。メイドが家事を代行することにより、主婦の家事負担が軽減されると、主婦の情緒的安定(精神的なゆとり)が、他の家族成員に対する貢献としてみなされる。感情マネージそのものが愛情表現としていっそう重要となる。
- 3)メイドの雇用が前提とされた人間関係、コミュニティが構築されており、日本人主婦が雇用したいかどうかという意志だけではなく、社会構造的に雇用せざるをえないという面もある。
- 4)メイドの雇用は家事負担を軽減するというメリットがある一方で、私的領域に恒常的な緊張をもたらす。それは、主婦とメイドのあいだでの家事の決定権をめぐる主導権争いや、メイドの視線が部外者による監視ととらえられること、また窃盗などのトラブルである。
- 5)日本人コミュニティでは、メイドは私的領域に存在するものの雇用関係にある他者であり、メイドによるトラブルの言説が繰り返し共有されることで、駐在日本人にとってのメイドの他者性をさらに意識させる契機となっており、メイドとの関係構築に大きく影響していると考えられる。

本研究は、主に日本人主婦がメイドを雇うことによって、主婦は家族責任として家事を担うという近代家族的な規範を、いかに変形させるのかという論点を、調査によって得られたデータに基づいて記述した。しかし、調査対象者の個々の語りの違いについては、それぞれがどのような社会構造を反映しているのかという点までは踏み込むことができなかった。今後の課題である。また、日本人主婦へのインタビュー調査を継続することで、日本人主婦・家族（とくに子供）とメイドの関係性についてさらに考察し、メイドの雇用によって私的領域における主婦の家事責任が家事の作業から感情マネージメントへシフトすることで家族がどのように変容するのか、主婦本人のアイデンティティにはどのような影響が生じるのか、についてより詳細な分析を行いたい。そのうえで可能であれば、メイドの側にアクセスして、日本人主婦はどのように見られているのか（フィリピン人雇用主と異なる点などとの比較）も視野にいれて、研究をすすめたいと考えている。

参考文献

- Arnado, J. M., 2003. Maternalism in Mistress-Maid Relations: The Philippine Experience, *Journal of International Women's Studies*, 4(3):154-157.
- Constable, N., 2007, *Maid to Order in Hong Kong: Story of Migrant Workers*, Second Edition, Cornell University Press.
- Hochschild, A. R., 1983, *"The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling."* University of California Press.
- , 2003a, "The Culture of Politics; Traditional, Postmodern, Cold Modern and Warm Modern Ideals of Care", *The Commercialization of Intimate Life*, University of California Press, California: 213-223. (=1995, *Social Politics: International Studies in Gender, State, and Society*, 2(3): 331-346).
- , 2003b, "Love and Gold", Ehrenreich, Barbara and Arlie Russell Hochschild eds, *Global Woman*, Granata Books, London: 15-30.
- Labor Code of The Philippines[FULL TEXT], <http://www.chanrobles.com/legal4labor3.htm> (2009年3月21日閲覧)
- Lan, P. C., 2006, *Global Cinderella: Migrant Domesticity and Newly Rich Employers in Taiwan*, Duke University Press.
- Uwe, Felick. 1995. "Qualitative Forshung." Rowohlt Tashenbuch Verlag GmbH.
- 上野加代子, 2007, 「シンガポールにおける外国人家事労働者」, 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編, 『アジアの家族とジェンダー』勁草書房: 263-284.
- 落合恵美子, 2000, 『近代家族の曲がり角』角川書店.
- 国民生活センター, 1998, 「第28回国民生活動向調査(要約)―家事と家事関連サービス―」, http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-980407_2.pdf (2009年4月13日閲覧) .
- 品田知美, 2007, 『家事と家族の日常生活』学文社.
- 清水美知子, 2004, 『＜女中＞イメージの家庭文化史』世界思想社.
- 西麻里子, 2004, 「メイド雇用家庭における家事分担と主婦役割への影響―香港在住の日本人駐在員家庭のケース」『家族社会学研究』15(2): 110-120.
- フィリピン編集部, 2007, 『トクトク特集2―2007年版』, フィリピン.
- 山田昌弘, 1994, 『近代家族のゆくえ』新曜社.

2008 年度次世代研究「家庭内における非家族成員による家事の代替可能性 ― フィリピン駐在の日本人主婦のメイド雇用の実態から ―」（研究代表：山本理子）による成果である。

【メンバー】

山本理子 （京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）